

公益財団法人北海道新聞野生生物基金

活動する人と応援する人をつなぐ

モ〜リ〜通信



©手塚プロ

Nature Communication Magazine **MALLY**
No.4 2025 July



地域の自然を知るための出発点

特集 自然系博物館

— 学芸員の現場レポート —

えんしんは、地域を
支え続け、地域とともに
発展します。



当金庫は、遠軽町に本店を置き、近隣の北見市、紋別市をはじめ旭川市、札幌市並びに千歳市等の13市20町1村の広域を事業基盤に、事業や生活の繁栄のお手伝いをするとともに、地域社会の一員として地元の中小企業者や住民との「絆」を形成し、地域社会の持続的発展に努めております。

最高**100万円**が
当たるチャンス!

夢付き定期預金

スーパードリーム

懸賞金総額
3,680万円
発売総額800億円の場合

ドリーム大賞	1等賞	2等賞	3等賞	4等賞
100万円 × 8本	10万円 × 80本	3万円 × 160本	1万円 × 800本	1,000円 × 8,000本

※ドリーム大賞は、抽選で決まった1つの当選番号から昇順に10本連続した番号が全て賞金10万円の当選となるもので、10本連続で当選された場合、1本10万円×10本で最高100万円が当たります。1

※取扱期間終了時において発売実績が800億円に満たない場合には、懸賞金の当選本数及び懸賞金総額が表示されている本数・金額より少なくなることがあります。

●**お取扱期間**／2025年4月1日～2025年9月30日 ●**抽選日・抽選場所**／2026年3月6日(金)当金庫本店で行います。 ●**ご利用いただける方**／個人のお客様 ●**募集総額**／800億円(募集総額800億円が完売となった場合には、1ユニット10億円を単位として増額、又は取扱期間終了日を待たずに募集を終了する場合があります。) ●**ご預金の種類**／スーパー定期、スーパー定期300 ●**お預入期間**／1年(自動継続扱い) ●**お預入金額**／スーパー定期は、10万円以上300万円未満、スーパー定期300は、300万円以上1,010万円未満 ●**金利**／スーパー定期又はスーパー定期300の1年もの店頭表示金利 ●**懸賞金抽選権(抽選番号)**／1口(10万円)あたり1本の懸賞金抽選権(抽選番号)をおつけします。懸賞金抽選権(抽選番号)は10000番から19999番までの1組1万本で1ユニットとします。抽選月の前月末までに解約された場合は、懸賞金抽選権(抽選番号)は失効します。 ●**当選番号の発表**／抽選日の翌営業日以降に店頭に掲示します。 ●**重複当選の場合の取扱方法**／抽選の結果、同じ抽選番号が2つ以上の賞に重複して当選し、懸賞金合計額が税引前で10万円を超えた場合には、次の順位により上位の等級の賞を当選とし、下位の当選を無効とさせていただきます。①ドリーム大賞②1等賞③2等賞④3等賞⑤4等賞 ●**懸賞金の支払方法**／当選した場合には、2026年3月27日(金)に、ご指定の預金口座にお振り込みします。(懸賞金には、20%相当の税金が課税されます。ただし、2013年1月1日～2037年12月31日までに受け取る懸賞金については、復興特別所得税が追加課税され、20.315%の税金が課税されます。) ●**その他**／やむを得ず満期前に解約される場合は、預入期間に応じた中途解約利率を適用させていただきます。本商品は、預金保険制度の対象商品です。 ●**店頭**に「商品概要説明書」を用意しております。



本店 〒099-0495 紋別郡遠軽町大通南1丁目1-15
電話(代表) 0158-42-2141
<https://www.shinkin.co.jp/engaru/>



遠軽信金

3 取り組む人びと [助成事業報告書より]

市民による小さなヒグマ対策実施と

4 その先へ向けたステップアップ

浦幌ヒグマ調査会

ハマナスをシンボルとした

6 海辺の生物多様性啓発事業

石狩浜ハマナス再生プロジェクト協議会

野生動物と共存する

8 “地域の力”育みプロジェクト

たぎかわ環境フォーラム

10 尻別川のイトウ繁殖地『見まもり隊』活動

後志管内ニセコ町・尻別川の未来を考えるオピラメの会

市民による鳥の分布情報収集・共有・利用の

12 仕組み作り

特定非営利活動法人 EnVision環境保全事務所

北海道の動物園水族館で取り組まれている絶

14 滅危惧種保全対策を紹介する多言語WEBサ

イトと動画サイトの構築による北海道の生物

多様性保全の普及啓発と国際交流の推進

国際交流サークルSukaRela(スカレラ)

16 森の課外授業

NPO法人癒しの森づくり



17 北海道新聞野生生物基金 [サポート企業]

18 北海道新聞野生生物基金 [寄付金のご報告]

20 北海道新聞野生生物基金 [2025年度事業計画]

21 北海道野生生物写真コンテスト

27 夏休み自然観察記録コンクール

特集

地域の自然を知るための出発点

自然系博物館

—学芸員の現場レポート—

30 北海道大学総合博物館 (大原昌宏)

北海道に生息する野生動物植物と、道内の自然史系博物館の関わり

32 北海道博物館 (水島未記)

植物標本が語る生物多様性を市民と共に次世代へ伝える

35 黒松内町ブナセンター (永田 優)

35 黒松内町企画環境課 (高橋興世)

小さなまちの森・川・湿地 守り、伝え、活かすために

37 利尻町立博物館 (佐藤雅彦)

明治時代から多くの研究者が訪れた魅力の離島



帯広百年記念館 (池田亨嘉)

40 ひがし大雪自然館 (乙幡康之)

浦幌町立博物館 (持田 誠)

3つの博物館の連携で探るそれぞれの「地域らしさ」

43 美幌博物館 (町田善康)

地域住民と一緒に自然を再生する博物館

根室市歴史と自然の資料館 (外山雅大)

46 生物多様性ホットスポット根室で

野生動物と人との共存を目指して

公益財団法人北海道新聞野生生物基金は、北海道新聞社の創立50周年を記念して1992年に設立しました。「北海道の広大で豊かな自然に生きる野生生物を未来に引き継ぎ、道民が健康的に暮らせる郷土づくりを応援する」を目的に活動を続けています。



「自然が大好き!!」を
応援します!!

©手塚プロ

助成事業

自然・野生生物保全と保護活動を支援

北海道の自然や野生生物の保護に取り組む団体・個人の活動に助成しています。一般助成のほか、2017年度から「杉本とき鳥類保護助成基金」も創設し、毎年多くの団体・個人を選考しています。



普及啓発事業

シンポジウムやフォーラムの開催

北海道の素晴らしい自然を守る活動や生物多様性保全の取り組みを紹介し、皆さんと一緒に北海道の未来を考えていきます。



自然体験事業

自然・環境出前講座

全道各地の学校や地域学習の場などに動植物の専門家を講師として派遣します。講師派遣費用は当基金が負担します。



環境エクサカーション

道内の大自然をフィールドにした親子エコキャンプや全道フットパスの集いなどを共催しています。



モーリーの森づくり

2006年から石狩管内当別町で12年から22年まで空知管内栗山町で植樹事業を行い、コロナ禍前の19年まで道新こども新聞「まなぶん」のこども記者や地元の子どもたちに参加してもらい、植樹と種まき、苗づくりなどを行いました。



コンテスト事業

北海道野生生物写真コンテスト

北海道内で撮影された野生生物の写真を広く募集し、動物と植物の2部門で入賞、入選作などを選び、賞品を贈呈、写真展も開催しています。



夏休み自然観察記録コンクール

北海道自然保護協会との共催で毎年、全道の小学生が対象で、夏休みの動植物を観察し、記録した作品を募集しています。優秀作品は道新こども新聞「まなぶん」や「まなぶんデジタル」に掲載しています。



出版事業

『モーリー通信』の発行

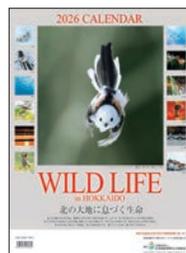
助成事業の報告をメインに、北海道の自然環境の現状や、寄付者の紹介、写真コンテスト入賞作品など「活動する人と応援する人をつなぐ」をテーマに発行。



収益事業

オリジナルカレンダーの発行、販売

北海道野生生物写真コンテストの全応募作品の中から厳選した作品で制作しています。動物部門は、迫力ある大判と愛らしい写真の中判吊下げ型。植物部門は卓上型で美しい花などを紹介し、使用後はポストカードとして使えます。



北海道新聞野生生物基金は、皆様の寄付で運営しております。
当基金へのご理解と、ご支援、ご協力をお願いいたします。

ゆうちょ銀行から

- 振込手数料が無料の専用払込取扱票を綴じこみました。事務局からの郵送も承ります。



Webから (Syncable)

- 手数料負担の有無が選択可能
- クレジットカード等に対応

銀行振り込みの場合

- 振込手数料のご負担をお願いします。
 - 領収書発行等のため銀行を通じて後日ご連絡をお願いする場合があります。
- 北洋銀行本店営業部 (028) (普)1456131
北海道銀行本店営業部(101)(普)1704635
口座名義 公益財団法人北海道新聞野生生物基金
(ザイ) ホッカイドウシンブンヤセイセイブツキキン



現場からの活動レポート

(北海道新聞野生生物基金・助成事業報告書より)

Activities Report 取り組む人びと

公益財団法人北海道新聞野生生物基金は、北海道の自然や野生生物の保護に地道に取り組んでいる団体・個人に事業の活動資金を助成し、支援しています。2024年度は一般助成が6団体に154万円、杉本とき鳥類保護助成基金が1団体に50万円の総額204万円を助成しました。

野生動物と共存する
“地域の力”育みプロジェクト
たきかわ環境フォーラム



森の課外授業
NPO 法人癒しの森づくり



ハマナスをシンボルとした
海辺の生物多様性啓発事業
石狩浜ハマナス再生プロジェクト協議会



尻別川のイトウ繁殖地
「見まもり隊」活動
後志管内ニセコ町・尻別川の
未来を考えるオピラメの会



市民による鳥の分布情報収集・
共有・利用の仕組み作り
特定非営利活動法人
EnVision 環境保全事務所

旭川市
滝川市
石狩市
札幌市
江別市
ニセコ町
浦幌町



市民による小さなヒグマ対策実施と
その先へ向けたステップアップ
浦幌ヒグマ調査会



北海道の動物園水族館で取り
組まれている絶滅危惧種保全
対策を紹介する多言語 WEB
サイトと動画サイトの構築による
北海道の生物多様性保全の
普及啓発と国際交流の推進
国際交流サークル SukaRela (スカレラ)

自分たちができることをテーマにヒグマ対策フォーラムを開催。10年続けた「ヒグマ侵入防止草刈り活動」をはじめ、新たな活動やネットワークを広めていきたい。

北海道新聞野生生物基金の助成を受けて2014年に開始した札幌市南区石山地区の豊平川河畔林における市民によるヒグマ侵入防止草刈り活動はその後も継続され、23年で10回目を迎えました。市民による小さなヒグマ対策も札幌市を中心に各地で展開されるようになり、23年度には再び同基金の助成を受けて、これら小さな市民活動のグループ間の情報共有と情報交換を行うネットワークの形成を目的に、札幌市南区石山地区で「市民による小さなヒグマ対策フォーラム（小グマフォーラム）」を開催しました。参加者からの高い評価を得て、24年度も継続して情報交換とネットワークを形成すること、そのきっかけとして「他地域の事例から自分達にできることを考える」を目的に、本州事例に関する基調講演とグループワークを主体としたフォーラムを開催しました。

24年12月1日10時から16時に、札幌市南区民センターにて、第2

回「市民による小さなヒグマ対策フォーラム」を開催しました。70名の方が参加し、最初に兵庫県丹波篠山市で獣害対策を実施している「NPO法人里地里山問題研究所（通称…さともん）」の代表である鈴木克哉氏による基調講演が行われました。

丹波篠山市で行っている獣害対策や市民を活動に巻き込むための取り組み、食やお祭りなどのイベントを組み合わせることで地域住民が獣害対策に関わり始めるきっかけを作り、関係人口を創出している事例など、北海道での市民レベルのヒグマ対策をどのように進めるといいのか、貴重なお話しをして頂きました。基調講演後は道内でヒグマ対策を行っている7団体からの事例紹介や札幌市行政からの事例報告が行われました。

午後からは道内事例紹介を行った団体が各テーブルに分かれ、それぞれの活動に巻き込みたい「人」やその目的について深掘りし、巻



木村ほのか氏によるグラフィックレコーディング





市民による小さなヒグマ対策実施とその先へ向けたステップアップ

浦幌ヒグマ調査会

Activities Report

(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。



フォーラムの参加者

き込む「方法」、巻き込んだ先のような可能性や発展があるのかなどについてのワークショップを行いました。今回のフォーラムは、ファシリテーションングラフイックカーの木村ほか氏にリアルタイムでレコーディングを行ってもらい、参加者がフォーラム中や終了後に内容を簡単に振り返られるように掲示しました。また、参加者同士が交流できるようにフォーラム終了後も会場を開放したり、フォーラムのHPを作成し、事例紹介を行った団体のHPやSNSのURLを掲載するなど、参加者同士の輪が広がるように工夫しました。実際に、フォーラム後は事例紹介を行った団体が制作し

ているヒグマグッズを観光団体が販売開始し、関係者同士の新たな繋がりの場を提供するという本フォーラムの目的の一つを達成できています。

フォーラムの最後にアンケートを行った結果、事例紹介を行った団体の活動に興味を持った参加者が多く、これまで市民活動を行ってきた方やそうでない方が一歩を踏み出し、活動の幅を広げていきたいとの回答が多くあり、また、エクスカーションを実施してほしいなどの意見があり、フォーラム実施後にそのような機会があれば、新たな活動への参加のきっかけになるのではないかと考えています。



鈴木克哉氏による基調講演

花摘みや花びらを蒸留して香りを楽しんだり、ハマナスを通じて石狩浜の自然環境を学ぶはまなすフェスティバルを開催。

石狩浜は、ハマナスなどの海浜植物群落を基盤とした豊かな海浜生態系が維持され、ハマナス彩る海辺の風景は地域の宝となりました。この自然環境を次世代へ残していくために保全、再生を進めるにあたり、「生物多様性」が維持されていくことが重要ですが、この視点は地域にまだ十分浸透していません。そこで、ハマナスをシンボルとしてハマナスをとりまく生きもののつながりへの気づきや発見を、地域の子どもとその親をメインターゲットに五感をつかった体験や学びを通じて啓発を図ることを目的に、「はまなすフェスティバル」を開催しま



販売ブース



蒸留実演

した。主催は石狩浜ハマナス再生プロジェクト協議会で、ハマナスをシンボルにした石狩浜の自然環境の保全・再生、活用を目指して活動している団体です。石狩浜海浜植物保護センター（石狩市）との共催で開催しました。開催日はハマナスの花が最盛期の2024年6月9日（日）、会場は石狩浜海浜植物保護センターと、隣接するハマナス再生園でした。ハマナス再生園は、かつて石狩浜で広く見られたハマナス群生地を再現するとともに、花摘み体験やハマナスを使った商品づくりなどの活用を進めている場所です。

はまなすフェスティバルでは、体験を通じて石狩浜の自然に親しんでもらう、知って学んでもらう、ハマナスや石狩浜の自然環境保全に興味関心を持ってもらうことを目標として、ハマナスの花摘み体験、ハマナスを観察して解くクイズラリー、ハマナスとつなが





ハマナスをシンボルとした海辺の生物多様性啓発事業

石狩浜ハマナス再生プロジェクト協議会

Activities Report

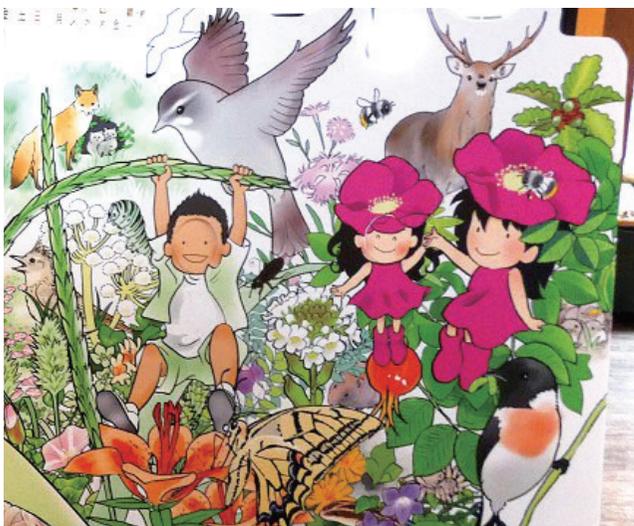
(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。



ワークショップ



花摘み近景



生きもの顔出しパネル

る生き物たちを紹介した顔出しパ
ネル、ハマナスの花びら蒸留の実演、
ハマナスの香りを活かしたワーク
シヨップ、ハマナスを使った食品
や雑貨の販売などを行いました。
当日は、およそ500名が市内
のみならず札幌市など近郊から来
場しました。親子やお孫さんを連
れたの参加も多く、参加者アンケ
ートでは、全員がハマナスや石狩浜
の自然への親しみがわいたと回答
しました。

花摘み体験は、小さな子どもか
ら年配者まで誰もが参加でき、香
りを感じながら日常にはない体
験となるので印象に残る人が多く、
ハマナス咲く石狩浜の自然に親し
んでもらう上でとても効果的な取
り組みとなりました。同時に外来
植物の抜き取りも行っていただ
き、ハマナス群落の維持に貢献いた
きました。
クイズラリーでは園内を巡るこ
とでハマナス以外の動植物へ目を

向けてもらい、生きもの顔出しパ
ネルでは石狩浜にくらす様々な生
き物を紹介することで、生物多様
性について知ってもらおうとかけ
とすることができました。
ハマナスの花びらから香りを抽
出す蒸留実演や、ハマナスを使っ
た石けんや入浴剤をつくるワーク
シヨップでは、ハマナスの効用や
利活用への理解、興味関心を深め
ていただくことができ、ハマナス
再生園のハマナスを使った食品や

コスメ雑貨の販売は、味や香りを
通じてハマナスを知り親しんでも
らうことができました。
今後も地域のイベントとして継
続を期待する声を多くいただくこ
とができました。また、はまなす
フェスティバルは、地域のみなさ
んに石狩浜の自然環境や生物多様
性保全への興味関心が浸透するの
に一定の効果をもっていると思わ
れ、継続して開催していきたいと
思います。

野生動物との軋轢を回避するために発足したプロジェクト。 ハイテクカメラを使ったモニタリングは、 迅速な情報共有にも役立っている。



定点観測用の自動カメラを調整するメンバー。滝川市江部乙の林道（2024年10月4日）

事業の目的

「家庭菜園がアライグマに荒らされた」「走行中にシカとぶつかってクルマが壊れた」「平飼いの養鶏場がクマの襲撃に遭った」…。野生動物たちとの接触で生じる軋轢をどうやってじょうずに回避するかという問題が、滝川市を含む中空知地方の住民にとっても「自分ごと」になっていきます。「野生動物と共存する地域の力」を育むべく、行政機関と連携しながら市民レベルの野生動物モニタリングを試みました。またその成果を広く共有して住民同士が語り合う場として「エコカフェ」「エコフェスタ」といった集会イベントを開催しました。

実施の様子

自治体の許諾を得て、滝川・赤平・深川の各市境界に近い林道に赤外線センサー付きの自動カメラを設置し、2024年4月から11月にかけて野生動物の往来をモニターし

ました。得られた撮像は、北海道

滝川高校理科数科の長澤秀治・生物教諭（たきかわ環境フォーラム運営委員）が解析しました。活動を住民のみならずにお知らせし、また結果を広く共有すべく、滝川市内で公開イベント「エコカフェ クマの通り道を探せ！」（7月6日、講師＝米内健二さん／滝川市くらし支援課、
 「エコカフェ 滝川ハンタークラブの活動」（11月17日、講師＝高橋佳さん／滝川ハンタークラブ）、
 「たきかわエコフェスタ2024 滝川の林道を利用する野生動物たち」（12月21日、講師＝長澤秀治さん／北海道滝川高等学校、早稲田宏一さん／EnVision 環境保全事務所、ゲスト＝山本牧さん／ヒグマの会、武田忠義さん／北海道ヒグマ対策室ほか）を開催しました。

成果

林道モニタリングでは、貴基金助成金を利用して購入した1台を含め、3カ所に計4機の自動撮影





野生動物と共存する“地域の力”育みプロジェクト

たきかわ環境フォーラム

Activities Report

(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。



自動カメラが撮影したエゾシカ(雄)。滝川市江部乙の林道

カメラを設置し、7カ月にわたって定点観測を行いました。エゾシカ、エゾヒゲマ、エゾタヌキ、キタキツネ、アライグマ、ヤマシギ、ノスリといった野生動物が撮影され、その成果を12月開催の「エコフェスタ」で報告しました。

7月、11月の「エコカフェ」にはそれぞれ30人あまり、12月の「エコフェスタ」には40人あまりが参加しました。講師の話題提供を受けた後、少人数に分かれてワークショップ形式で意見を交わしました。遭遇した場合にとりわけ高いリスクをはらむクマに対して、いかに迅速に具体的な個人情報や地元住民の間で共有するかが、問題回

避のカギであることを確認しました。また、アウトドアスポーツなどのさい、クマとの遭遇を前提に個人レベルの防衛意識を高める必要も語られました。社会が許容できない被害をもたらす野生動物の捕殺に、地元猟友会(滝川ハンタークラブ)が果たしている貢献にも光を当てることができました。これ

らの成果は、たきかわ環境フォーラムのウェブサイト(<http://ecoup.lacocan.jp>)で公開しています。たきかわ環境フォーラムは、次年度以降も市民レベルのモニタリングを継続し、情報共有・意見交換の場を作っていけたら、と願っています。



たきかわエコフェスタ 2024「滝川の林道を利用する野生動物たち」(2024年12月21日)



たきかわ環境フォーラム
<http://ecoup.lacocan.jp>

「オビラメ」とも呼ばれる尻別川のイトウ、 一時は絶滅寸前と危ぶまれたが、わずかに残る自然繁殖支流の 見守り活動などで「南限の地域個体群」の復元を目指している。



見まもり参加者 (2024年5月6日)

事業の目的

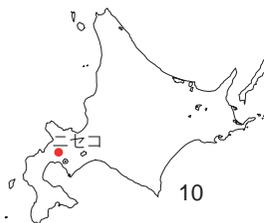
尻別川は、絶滅危惧種イトウ(サケ科)の生息南限です。河川改修など過度な自然改変によって1980年代に個体群サイズの著しい縮小が起き、地元住民を中心に、その保護と復元を目指す当会が設立されました。

「オビラメ」は当地におけるイトウの地方名です。当会は90年代に「絶滅寸前」と判定されたイトウ尻別川個体群の繁殖環境を改善し、かつてのようにたくさんのイトウたちが自力で健康的に世代交代していける豊かな尻別川を取り戻すことを目指しています。2024年度の本事業では、イトウ繁殖遡上期にあたる春の融雪増水期にあわせ、倶知安町内の自然繁殖河川で、繁殖集団のモニタリングと、釣り人、撮影者などによる脅かし防止を兼ねた「見まもり」活動を行ないました。この場所は、広大な尻別川流域内で唯一、人為的な再導入に頼らず維持されている非常に貴重

な自然繁殖地です。

実施の様子と、その成果

24年4月20日から5月10日にかけて、尻別川流域で唯一確認されているオリジナル個体群の自然繁殖地(倶知安町)で24時間体制の「見まもり活動」を実施しました。河川管理者や地元自治体と協働しながら、2011年の初年から毎シーズン欠かさず実施している活動です。河川管理者から河川敷占有許可を得て、活動拠点「オビラメハウス」(移動式コンテナハウス)を設置し、パトロール省力化のために、新たに赤外線センサー付きの自動撮影カメラ2機を導入。産卵ポイントを見渡す位置にセットし、携帯電話回線経由の自動発報装置と組み合わせて、撮像をリアルタイムでモニターしました。さらにデジタル水温計とデータロガーを導入し、およそ45日間にわたって、イトウ繁殖河川の水温変化を観測しました。





尻別川のイトウ繁殖地『見まもり隊』活動

後志管内ニセコ町・尻別川の未来を考えるオピラメの会

Activities Report

(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。



喜茂別小学校 3 年生の現地見学に協力。迫力あるイトウの自然産卵を間近に観察できました

期間中の見まもり活動参加者はのべ87人・日でした。前年までを下回る数字で、自動装置の導入による省力化と、14シーズン連続の「完全保護」を同時に達成できました。イトウ自然繁殖地で活躍した2台の自動撮影カメラは、「見まもり」終了時に取り外し、再導入（人工孵化稚魚のハビタットへの補充）のためにイトウ親魚を飼育している「有島ポンド」と、今季新設した人工ふ化イトウ稚魚の飼育施設「ヌプリの森水」（いずれもニセコ町内）に

セットし、来訪者のプライバシーに配慮しつつ、モニタリングを実施しました。「ヌプリの森水」のカメラには、施設が無になる夜間や早朝にしばしばアライグマ（環境省指定「総合対策外来種」）がひんばんに撮影され、被害の未然防除に役立ちました。こうした成果は当会発行のニューズレターに詳しく掲載して、ウェブサイトで公開しています。基金の手厚いご支援に心から感謝を申し上げます。



イトウ繁殖河川のそばにセットされた自動カメラ

タンチョウやワシ類の分布状況や個体数を、 市民と共にモバイル端末で調査。収集したデジタルデータは、 分析・共有をスムーズにし、新たなネットワークを作り出す。

関係者による共有手法・情報収集ト
ライアル・集まった情報の使い方の
検討

鶴居村でのタンチョウ個体数調査 の情報収集モデルの試行

鶴居村では、毎年タンチョウの
分布および個体数調査を市民と共
に実施しています。本事業ではモ
バイル端末を活用した情報収集を
試行し、スムーズな情報蓄積・共
有を可能にしました。

役員職員やタンチョウ関係者と
の打ち合わせを重ねて、実施の方
針やシステムの内容を定め、市民
への操作説明会を実施しました。

旭川・十勝周辺でのタンチョウ情 報収集の体制構築

近年、タンチョウは個体数が増
加しており、道東地域だけでなく、
道北や道央地域方面へも分布が拡
大しています。しかし、どこでい
つタンチョウが見られたかという
情報は集約できていません。そこで、

本事業では、分布拡大地域でのモ
バイル端末を活用した情報収集の
協力者を募るため、情報収集シス
テムの説明打ち合わせや使い方講
習会を実施しました。

釧路・旭川周辺でのワシ情報収集 の体制構築

北海道ワシ一斉調査は、これま
で調査結果の記録・共有は紙文書
で実施されてきました。

ワシの種（オオワシ・オジロワシ）
や羽数、位置の記録は、環境を保
全する上で重要な情報です。デジ
タルで情報を収集することで、活
用の幅は広がると考えられるため、
デジタル化への移行を進めていま
す。

本事業では、全道約200名の
調査員の方に協力を呼びかけるた
め、各地へ赴き、情報収集システ
ムの説明打ち合わせや使い方講習
会を各地で実施しました。



鶴居村でのタンチョウ情報収集モデルの試行：打ち合わせ



鶴居村でのタンチョウ情報収集モデルの試行：市民説明会

地域の市民を巻き込んだ意見交換会

毎年実施される北海道ワシ一
斉調査に関わる調査員を主な対象と
した意見交換会を実施しました。

約40年の歴史を持つ調査ですが、
これまで調査員同士の情報交換や
交流会は実施されていませんでした。
そこで、全道各地の調査員へ
話題提供を依頼し、調査結果の共

【実施日時】

2024年 7/16(火)～18(木)、8/6(火)
～8(木)、10/15(火)～17(木)、10/23(水)
～25(金)、25年 1/23(木)・24(金)、2/
13(木)・2/17(月)～19(水)

【場所】

鶴居村、中標津町、釧路市、根室市、旭川市、
足寄町、帯広市など

【参加者組織】

右記組織職員および地域住民の方など





(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。

本シンポジウムは、対象種や目的、運営主体などが異なる6つの生き物調査事例を紹介する内容とし、市民や行政機関、企業など様々な方を対象者に実施しました。「生き物調査の内容」や「運営方法」に興味・関心のある約150名の申し込みがありました。また、講演者には調査に関連する標本やレプリカなどのグッズを持参してもらい、来場者がより楽しめる工夫をしました。

シンポジウム

有方法や持続可能な調査体制などの意見交換を行いました。
高齢化などによる調査員不足や、調査結果の活用に関する意見が挙げられるなど、調査員同士の技術や知識が共有され、今後のワシ一斉調査を持続させるためのネットワークづくりができました。

【実施日時】
24年7/17(水) 18~20時

【場所】
釧路圏摩周観光文化センター(弟子屈町)

【企画・運営】
中川元(オジロワシ・オオワシ合同調査グループ)・高田令子(ニムオロ自然研究会・貞園利夫(釧路市立博物館・長谷川理/工藤知美(EnVision環境保全事務所))

事例発表後のパネルディスカッションでは、市民参加型調査へ多くの参加者を募るコツや情報収集の活用方法の課題について、講演者同士の質疑も含めて活発な議論が行われました。

【実施日時】
25年3月16日(日) 14~17時

【会場】
札幌市教育文化会館 研修室403(札幌市中央区北1条西13丁目)

【講演者】
高田令子(ニムオロ自然研究会・有賀望(札幌ワイルドサーモンプロジェクト・札幌市豊平川さけ科学館)・大澤夏生(札幌市環境局環境都市推進部環境共生担当課環境共生係)・横山雅彦(旭化成(株)・富士支店企画管理部)・松本文雄・照井滋晴(NPO法人環境把握推進ネットワークPEG)

**生き物調査を知ろう！
参加しよう！ 取り組もう！**
- 生物多様性保全のための生き物情報の収集と活用 -

【日 時】 2024年3月16日(日) 14:00-17:00
【会 場】 札幌市教育文化会館 研修室403(札幌市中央区北1条西13丁目) 受付時間(12:00~15:00)
【定 員】 会場 約40名・オンライン 100名
【参加費】 無料

※生き物が好きで、調査に参加してみたい！
※生き物調査を実施し、継続した調査体制を構築したい！
※生物多様性保全に貢献したいけれど何から始めればよいかわからない！

いま生物多様性保全に必要な生き物とは！
みんなのできる取り組みを一緒に考えてみましょう！

プログラム

<p>オオワシ・オジロワシを 一斉カウント調査 北海道各地・200人で実施！</p> <p>高田令子 ニムオロ自然研究会</p>	<p>市民調査 「みんなでササガサ」 データの質性と 参加者の意識</p> <p>大賀望 札幌ワイルドサーモンプロジェクト 札幌ワイルドサーモンプロジェクト</p>	<p>ざっばろ生き物さがし プロジェクト - 産地の市民調査から 拡大できること -</p> <p>大澤夏生 札幌市環境局環境都市推進部環境 共生担当課環境共生係</p>	<p>自然共生サイトあざひ・いの ちの森を活用した生物調査 - 企業が取り組む 生物多様性保全 -</p> <p>横山雅彦 旭化成(株) 富士支店 企画管理部</p>
<p>タンチョウの分布状況を把握 - 標本標本の目撃情報から 分かること -</p> <p>松本文雄 NPO法人 環境把握推進ネットワークPEG</p>	<p>生き物調査をWEBMAPに 重ねて調査地域を把握 - 調査履歴のモニタリング やオゾンとオゾン層を調査する -</p> <p>照井滋晴 NPO法人 環境把握推進ネットワークPEG</p>	<p>パネルディスカッション - パネラー：上記講演者 進行：工藤知美 EnVision環境保全事務所</p>	

お申込はコチラ
URL: <https://x.gd/2yQg>
申込: 3月15日(土) 17時まで

EnVision環境保全事務所
調査員は皆様
の参加に
ご協力ください！

シンポジウムのチラシ



シンポジウム：講演者



シンポジウム：会場の様子



YouTube 旭川市旭山動物園



Nature Discovery (北海道の自然発見)
<https://hokkaidond.wixsite.com/hokkaidond>



ホームページ
 (上) 英語版、(下) 中国語版



札幌市円山動物園ページ



留学生と取り組んだ多言語サイトと動画サイトが 北海道の動物園と水族館を世界に発信！

国境をこえて、留学生と北海道の学生が環境保全を考える。

国際交流サークル SUTARA (スカラ) は、2006年に酪農学園大学に設置された国際交流と自然環境の保全を目的としたサークルです。語学を習得したいという学生から、海外で自然環境の保全に取り組みたい学生、将来海外で働きたいという学生まで、様々な動機を持ったメンバーで構成されています。部員は、酪農学園大学の学生が中心ですが、他大学や高校からも募り、横断的な活動を行っています。

国際交流サークル SUTARA (スカラ) は、2006年に酪農学園大学に設置された国際交流と自然環境の保全を目的としたサークルです。語学を習得したいという学生から、海外で自然環境の保全に取り組みたい学生、将来海外で働きたいという学生まで、様々な動機を持ったメンバーで構成されています。部員は、酪農学園大学の学生が中心ですが、他大学や高校からも募り、横断的な活動を行っています。

道内動物園・水族館の多言語(英語、中国語)のホームページと動画の作成

狙い
 本事業は北海道の学生たちとマレーシア人留学生が共同で、北海道の野生動物のおかれた現状を広く海外に知ってもらうことや、自然環境の素晴らしさをアピールすることが目的です。

事業の内容は、「道内動物園・水族館の多言語(英語、中国語)のホームページと動画の作成」「道内動物園・水族館に飼育されている絶滅危惧種のリストの作成」「自然環境保全をテーマにした留学生と地元学生との交流」の三つの取り組みです。この取り組みはSDGs、特に目標15の「陸の豊かさ」の達成に貢献する活動の一つだと考えます。

昨年度作成した Hokkaido Nature Discovery (北海道の自然発見) サイトに、酪農学園大学等で野生動物や森林の保全について学ぶマレーシア人留学生と共同で、北海道の動物園と水族館取材し、多言語(英語、中国語)のホームページと動画を加えました。動画では、動物園、水族館の職員の方や、観光客にインタビューし、各園館ページに掲載し、Hokkaido Nature Discovery (北海道自然発見) として YouTube チャンネルに取りまとめました。

札幌市円山動物園、旭川市旭山





森を歩いて、観察して、聞いて、食べる体験が、身近な自然に興味を持ち、大切に思うきっかけに。

身近に残された自然の中で、体験や遊び、食を通して自然の大切さを学ぶというのをテーマとして小学生、中学生（親子参加可）を対象に令和6年5月25日に旭川市「緑の森ガーデン・癒しの森」でイベントを開催しました（小学生13名、中学生2名、同伴父母13名合計28人が参加）。

森歩きでは実際に森の中に芽吹いている植物を観察しながら、食べられる、食べられないの見分け方などの説明をし食べてみたい植物をその場で採取、その後会場に戻り自分たちで薪割りをし、薪ストーブを使い調理をすることで、自然界で生きるための術や資源活用の体験をしてもらいました。

自ら採取した植物は天ぷらにして食べてもらいましたが、旬の山菜以外にもタンポポやスミレ、ツルアジサイ、アマドコロ、エゾカンゾウなど普段口にするのがないものも食材として活用できるという知識になったと思います。

その他、森歩き中にはセミの脱皮直後の様子が偶然出会ったりと、身近な森の中で野生生物の生態を観察することができ、自然に関心を持ち大切に思う気持ちも芽生えたのではないかと思います。

森の中に生息している山野草の生態や、身近の野生生物の生態などのおもしろ話を事前に聞いてもらってから森歩きをすることで、より興味を持って観察したり、話の中で説明のあったことが実際に目の前で体験になることもあり、喜びや驚きの感動体験に繋がっていました。

また子供たちの喜び楽しむ姿を見て親御さんも一緒に楽しみながら親子間のコミュニケーションを深めていきました。

気候の変化などによりその年その年で採取できる植物や体験できることも違い、野外イベントのため天候に左右されることもありませんが、用意させていただいたタープなども活用しながら、身近な自然を通して自然への興味を持ってもらい、大切に作る気持ちを育んでもらえる環境をこれからも継続して提供していきたいと思えます。



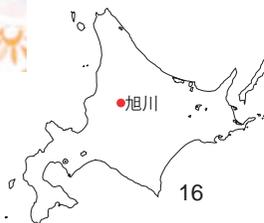
森のおもしろ話



採取した植物を天ぷらで食べる



森歩き



当基金を支援して下さるサポート企業のみなさま(申込順)

お申込みは随時、受け付けております。年会費1口3万円です申し込み口数に上限はありません。北海道の大自然や野生生物の保護・保全に関心がある企業や個人の皆様の申込をお待ちしています。(2025年5月現在、24企業)

カネカ北海道	札幌市中央区北2条西3丁目1-20 札幌フコク生命越山ビル13階
運河の宿 おたる ふる川	北海道小樽市色内1丁目2-15
北海道コカ・コーラボトリング	札幌市清田区清田1条1丁目2番1号
新倉屋	小樽市花園1丁目3番1号
ツルハ	札幌市東区北24条東20丁目1番21号
函館軟式野球連盟	函館市上新川町18番
北海道新聞 HotMedia	札幌市中央区大通東4丁目1番地
アイワード	札幌市中央区北3条東5丁目5-91
ウヤマエンジニアリング	札幌市北区新川4条17丁目1-1
きんでん北海道支社	札幌市中央区北3条西4丁目1番地1
道新アクセス	札幌市中央区大通東4丁目1番地
網走信用金庫	網走市南4条西1丁目8番地
道新総合印刷	北広島市大曲工業団地8丁目2-1
遠軽信用金庫	北海道紋別郡遠軽町大通南1丁目1-15
日本ハム	大阪市北区梅田二丁目4番9号ブルーセタワー
登別温泉ケーブル	登別市登別温泉町224番地
太田硝子店	旭川市永山3条5丁目1番2号
セコマ	札幌市中央区南9条西5丁目421番地
道新文化事業社	札幌市中央区大通東4丁目1 北海道新聞社ビル6階
エフエム北海道	札幌市中央区北1条西2丁目 札幌時計台ビル14F
道新販売センター	札幌市厚別区青葉町6丁目1-33
道新サービスセンター	札幌市中央区大通西18丁目1-30 道新西ビル
ほくしん	砂川市西1条北10丁目1-14
ニコンシステム	神奈川県横浜市西区みなとみらい3-3-3 横浜コネクタスクエア8階



全国の書店にて
好評発売中

日高山脈は、北海道の脊梁=背骨だ。

The Backbone of Hokkaido

地球のエネルギーが生み出した
珍しい地質と地形、
そして貴重な自然や生態系。
この不思議な山々は国内35番目で
最大規模の国立公園になった。

この山脈に刻まれた
エピソードと様々なドラマが、
ぎゅっと詰まった1冊。

The Hidaka Mountains

日高山脈襟裳十勝国立公園誕生記念出版— A4判変形オールカラー192頁 定価: 2,700円+税 共同文化社

11月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市中央区、匿名の方は5千円●札幌市北区、藪実恵子さんは1万円、匿名の方2名はそれぞれ1万円と3千円●札幌市南区、坂橋禎子さんは2万円、匿名の方は3千円●札幌市豊平区、今野裕子さんは5千円、かわうそ倶楽部は3333円●旭川市、匿名の方は3175円●江別市、伊藤洋子さんは1万円、匿名の方は3万円●紋別郡遠軽町、匿名の方は3万円●北海道野生生物写真コンテスト作品展会場の募金箱に集まった1021円●宮城県名取市、川村和宏さんは5万2910円●道新社友懇親会パーティーの募金箱に集まった5千円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

12月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市中央区、西村昌晃さんは3千円、匿名の方は1万円と同2名の方々はそれぞれ3千円●札幌市北区、山田克彦さんは5万円、匿名の方は1万円、橋場久美子さんは5千円●札幌市南区、刈屋尚さんは2万円、匿名の方は5千円●札幌市東区、名和美津子さんは2千円●札幌市豊平区、二本柳貴夫さんは3千円●札幌市白石区、川畑寿美子さんは1万円●札幌市清田区、金江大次さん、金江久恵さん、金江明彦さんはそれぞれ5千円、上ヶ島精一さんは3千円、匿名の方は1万円●札幌市手稲区、柳内大地さんはナキウサギ保護のため2万円、高橋義一さんは5千円●札幌市厚別区、匿名の方は1万円、神田豊子さん、匿名の方はそれぞれ5千円●函館市、山口精次さんは5千円●旭川市、匿名の方は6千円、匿名の方は5千円●釧路市、工藤悦子さん、匿名の方はそれぞれ5千円●伊達市、匿名の方は5千円●江別市、匿名の方は1万円●北広島市、匿名の方は3千円●札幌市白石区東札幌2の5、シビテックは自社オリジナルカレンダーの売上金1万6千円●帯広市西11南1、ザ・本屋さんは、募金箱に集まった8887円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

2025年1月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市中央区、匿名の方は2万円●釧路市、匿名の方は3千円●神戸市、畠中愛さんは7070円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

2月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市中央区、匿名の方は3千円●札幌市東区、畠山照美さんは2万円、金子正美さんは3175円●札幌市厚別区、匿名の方は1万円●札幌市、荒島さんは1万7000円●旭川市、伊達美佐さんは20万円●江別市、匿名の方は1万円●河東郡音更町、斎藤みどりさんは5千円●天塩郡天塩町、富樫正さんは1万円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

3月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市東区、神野明美さんは1万582円、藤懸博史さんは1万円●札幌市南区、匿名の方は1万円●札幌市西区、佐々木登美代さんは10万円●札幌市中央区大通東4、北海道新聞社共栄会は50万円●札幌市中央区北1西3、札幌国際プラザ・コンベンションビューローは2万7000円●札幌市中央区北5西2、札幌駅総合開発は募金箱に集まった15万7920円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。●旭川市東旭川町倉沼、「特定非営利活動法人旭山動物園くらぶ」は「北海道産いきもの保全プロジェクト」へ100万円を寄付した。

4月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市厚別区、戸田幸四郎さんは5万円、匿名の方は2万円●北見市、網野美江子さんは5千円●江別市、秋山みゆきさんは5千円●北広島市、匿名の方は1万円●東京都国分寺市、金子道代さんは1万円●札幌市中央区北5西4、大丸札幌店はレジ袋とオリジナルマイバッグの収益金30万円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

ご支援ありがとうございます。

公益財団法人北海道新聞野生生物基金は多くの企業と個人のみなさまに支えられています。毎月寄付をして下さる方、定期的に寄付をして下さる方、何かの記念日に寄付をして下さる方、ナキウサギ、フクロウを守って下さいと寄付して下さる方、年会費を収めて頂いているサポート企業の皆様によって支えられています。北海道の大自然といきものたちを守り後世へとつないで行くため、今後ともご支援をよろしく願います。

2024年5月～2025年4月に寄付をくださった方々です。他にも掲載を希望されない方々からも寄付をいただいています。

2024年5月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市白石区、匿名の方は1万円●東京都国分寺市、金子道代さんは1万円●釧路市、匿名の方は3千円●札幌市西区福井1、北海道コンクリート圧送協同組合は2万円●札幌市西区発寒9の9、環境テクニカルサービスは道新野生生物基金制作の「花のエコ・イラスト百撰」を使用した協賛金として5万円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

6月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市厚別区、匿名の方は1万円●札幌市手稲区、柳田風さんはフクロウ保護のため2万円●北広島市、匿名の方は1万円●標津郡中標津町、匿名の方は千円●江別市、水島末記さんは1万円●苫小牧市、正木由紀さんは5千円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

7月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●釧路市、匿名の方は5千円●川崎市、斉藤政彦さんは1万円●旭川市金星町1、国際ソロプチミスト旭川は3万円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

8月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市北区、橋場久美子さんは5千円●札幌市南区、奥津早苗さんは5千円●札幌市東区、大淵武雄さんは2千円●札幌市白石区、佐藤研一さんは1万円●釧路市、匿名の方は3千円●斜里郡小清水町、大出洋子さんは1万円●川上郡弟子屈町、ペンションぱぴりおは募金箱に集まった2万8197円●北海道新聞野生生物基金のネーチャーフォーラム会場の募金箱に集まった1万1600円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

9月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市中央区、匿名の方2人はそれぞれ1万円●札幌市豊平区、匿名の方は1万円●札幌市南区、安部英夫さんは1万円●札幌市東区、匿名の方は1万円●札幌市厚別区、匿名の方は1万円●旭川市、匿名の方は5千円●滝川市、匿名の方は1万3700円●石狩市、向野文彦さんは1万円●河西郡中札内村、吉田真弓さんは2万円●水戸市、佐藤紘一さんは1万円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

10月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円●札幌市中央区、匿名の方は5万円●札幌市北区、中川明彦さんは1万円●札幌市南区、小堀煌治さんは5千円●札幌市手稲区、竹中邦博さんは5千円●札幌市清田区、鷹坂正明さんは1万円●函館市、匿名の方は3万円●旭川市、匿名の方は5千円●釧路市、匿名の方は3千円●小樽市、匿名の方は千円●富良野市、大倉和江さんは5千円●恵庭市、匿名の方は1万円●川上郡弟子屈町の磯貝高士さんは10万円●山梨県都留市滝口瑛子さんは1120円●札幌市中央区大通東4、道新会札幌八日会は募金で集まった5万5116円●札幌市中央区大通東4、北海道マラソン組織委員会は110万●札幌市中央区北5西4、大丸札幌店はレジ袋の収益金10万9243円●二海郡八雲町、田仲節子さんは5千円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

公益目的事業 (一般会計)

助成事業

自然保護、野生生物保全に尽力する団体・個人の活動を支援している。「一般助成」が200万円、「杉本とき鳥類保護助成」が100万円を予算に、上限100万円で申請を受け付けている。事業実施後には報告書の提出を求め、モーリー通信などに掲載する。また、25年度から「北海道産いきもの保全プロジェクト」への助成も開始した。同プロジェクトへの寄付を財源に同プロジェクト事務局へ助成する。

一般助成

●札幌市・北海道爬虫両棲類研究会「道民参加型・道内爬虫類両生類分布一斉調査事業(ハーブソンHokkaido2025)」30万円
 ●札幌市・山のトイレを考える会「大雪山と日高山脈のトイレ問題解決に向けた取り組み」25万円 ●札幌市・特定非営利活動法人ウォークラボ札幌「身近な野生生物との共生～さっぽろラウンドウォークを歩いて知ろう・学ぼう」35万円 ●小樽市・特定非営利活動法人自然教育促進会「スズラン群生地の保全のための環境ボランティア」29万円 ●滝川市・たきかわ環境フォーラム「野生動物と共存する「地域の力」育みプロジェクト(2年目)」10万円 ●江別市・国際交流サークルSukaRela(スカレラ)「北海道の中高校生のための生物多様性多言語テキストの作成とワークショップの開催」25万円 ●後志管内ニセコ町・尻別川の未来を考えるオビラメの会「尻別川のイトウ繁殖地「見まもり隊」活動」10万円 ●上川管内美瑛町・大雪山マルハナバチ市民ネットワーク美瑛部「大雪山麓における特定外来生物オオハングソウの分布と防除に関する取り組み」10万円 ●十勝管内池田町・十勝自然保護協会「阿寒富士西麓の森のアカエゾマツ林床における風穴、風穴植生等の調査研究及びその報告書の制作」20万円

杉本とき鳥類保護助成

●札幌市・NPO法人札幌カラス研究会「身近な野鳥であるカラスとの共存・カラス対応マニュアル～北海道版2026改訂～」13万円
 ●旭川市・繋ぐのは命プロジェクト「天売島探検隊」20万円 ●宗谷管内利尻町・利尻島ウミネココロニーについて考える会「ウミネコは育む利尻の海～絵本で伝える自然の繋がりに～」20万円

北海道産いきもの保全プロジェクト

●札幌市・北海道産いきもの保全プロジェクト事務局「北海道産いきもの保全プロジェクト 北海道の野生生物の生態や自然保護についての教育普及啓発事業の実施」60万円

普及啓発事業

シンポジウム・フォーラム

モーリー通信3号でも取り上げた「北海道産いきもの保全プロジェクト」のフォーラムを8月に開催した。日本動物園水族館協会に加盟の道内9園館から代表者が集まり、北海道に生息するいきもの保全活動について報告があった。本年度も野生生物保護をテーマとしネイチャーミニフォーラムを予定している。

自然体験活動事業

環境・自然出前講座

基金の評議員ら自然や環境問題の専門家が、学校や地域講座などに出向いて講演している。24年度は大空高校で開催した。本年度もすでに講演の引き合いがあり、数回の開催を予定している。

環境エクスカージョン

自然体験から北海道の素晴らしさや野生生物の息づかいを感じ取れる参加型イベントを企画する予定。

モーリーの森づくり

2006年度の当別町「道民の森」、12年度から栗山町の用地で植樹や種の採取・苗づくりなどを実施した。コロナ禍以降は保育管理のみを行っている。今後も期限延長により必要に応じて実施していく予定。

コンテスト事業

写真コンテスト

応募者の減少傾向が続き24年度も前年比19人減となった。今年度はPR活動をいち早く展開、カメラ量販店でのチラシ配布や道内の高校、大学への案内などを行っている。30歳以下の応募者を対象としたU30特別賞も設けて実施する。9月の審査会で入賞、入選作を選考、北海道新聞紙上、基金ホームページ、モーリー通信などで紹介する。また、写真展も10月31日よりフジフィルムフォトサロン札幌で開催する。

夏休み自然観察記録コンクール

北海道自然保護協会との共催で、道内小学校に呼びかけて作品を募集する。応募が減少傾向にあるが、PR時期を早めて応募者増を目指す。10月の審査会后、入賞・佳作を北海道新聞紙上で発表、優秀作品は道新こども新聞「まなぶん」や「まなぶんデジタル」、基金ホームページやモーリー通信でも紹介する。

出版事業

自然情報誌「モーリー通信」の発行

年1回(6～7月)に発行する。基金の各種事業の紹介や北海道に生きる野生生物に関連する特集などを掲載している。モーリー通信は、道内のネイチャーセンターや図書館、博物館を中心に配置している。

収益事業 (特別会計)

北海道の雄大な自然の中で生きる野生生物を被写体とした「北海道野生生物写真コンテスト」の応募作品の中から厳選して3種類のカレンダーを制作している。価格は、吊下げタイプ1700円、中綴じタイプ1400円、卓上タイプ1200円で、収益は公益目的の助成事業など、基金の活動に利用されている。

北海道野生生物 写真コンテスト〈入賞作品〉

第30回北海道野生生物写真コンテストの入賞・入選作34点が決まった。公益財団法人北海道新聞野生生物基金と北海道新聞社の主催。応募者の総数は166人（前年比19人減）で、動物部門344点、植物部門91点の計435点（同51点減）の応募があった。動物部門1席には釧路市の今泉俊雄さんの「虹に翔ぶ」が、植物部門1席には十勝管内音更町の網影悦子さんの「夢想花」がそれぞれ選ばれた。また、全応募作品の中から、同基金オリジナルカレンダー2026年版の動物編13点、植物編13点選ばれた。入賞作11点と優秀作23点は11月1日から6日まで、富士フィルムフォトサロン札幌（札幌市中央区大通西6）で展示された。

◇審査委員（敬称略） 寺沢孝毅（動物部門審査委員長）、奥田實（植物部門審査委員長）、小川巖、中井和子、西村昌晃、川村公人

動物部門講評（寺沢）

一席の「虹に翔ぶ」の主役は、鳥類では最速クラスで飛ぶことができるアマツバメだ。海食崖に面した空間を、滝を背景に飛翔する姿を捉えた。目を引くのは水飛沫に浮かぶ虹色で、差し込む光が限られた条件に合ったときだけ現れる光彩だ。それを鮮やかに表現で

きたことが作品の完成度を高めた。

二席の「デュエット」は、水鏡が青空を淡い色に映し出し、そこに2ペアのイトトンボが絶妙なバランスで映し出されている。身近にある小宇宙を見逃さずに、美しく切り取った作者のセンスが光る。

「食べないで：」は、捕食という決定的瞬間の一瞬手前を切り取っている。目線を合わせる大きさがあまりに違う両者がこの瞬間、どんな思いを巡らせたのか。その後の結末まで想像させる物語性ある作品だ。

三席の「未来へ繋ぐ」は、サクラマスの美しい朱色と、遡上する二匹の躍動する姿に胸を打たれる。作品からは、この営みが北海道にいつまでも続いてほしいという願いが伝わってくる。

「黄昏時」は、傾いた陽光がスポットライトのように注いで、エゾシカとスキを浮かび上がらせた。その瞬間を逃さずに捉えた作者の感性がすばらしい。

「スカイダイニング」は、エゾモモンガの滑空シーンを完璧に捉えた秀作だ。くわえているハンノキの花序が作品の価値を高め、見る者を楽しませてくれる。

鮫島和子賞の「氷上のオアシス」は、北海道らしい白い世界の一場面。伝わってくる厳しい寒さと対照的なのは、活発に水飲みや水浴びなどをするヒレンジャクの姿だ。野生を生き抜く強い生命力を感じさせるすばらしい作品だ。

植物部門講評（奥田）

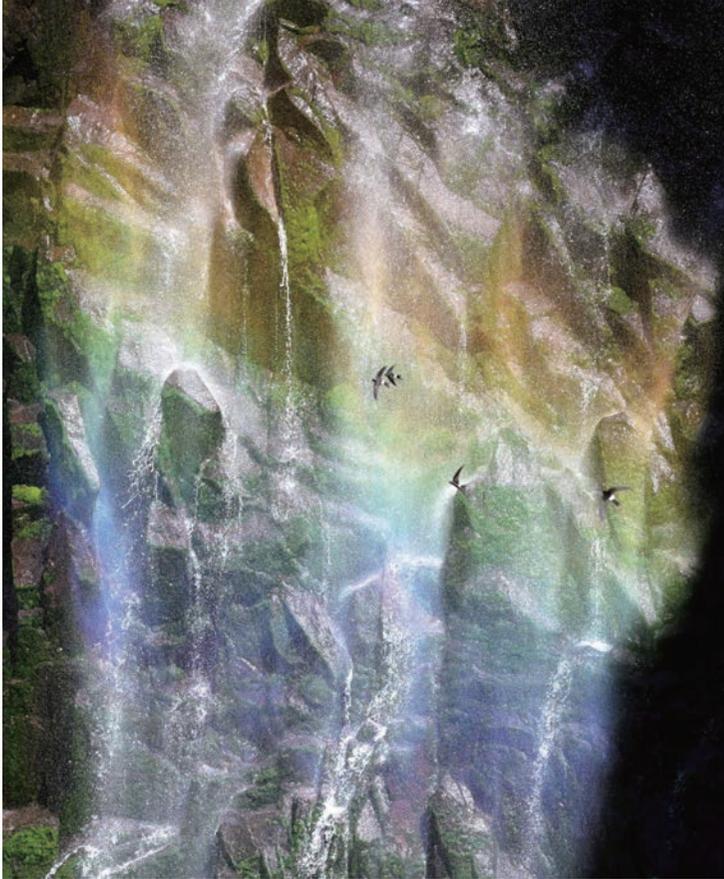
近年、スマートフォンで撮影することが一般的になってしまった感があるなか、重い機材を構え、被写体と真正面から向き合うことが作品の臨場感につながる。

一席の「夢想花」は、火山性の沼に咲くミズバショウを捉えたものだ。黄銅色の沼の扇状の光のなかの一輪の仏炎苞は仏さんに見えなくもない。見事な情景である。ほんの少し低い位置からもう一段近寄ることで力強さは一層するだろう。右端の木立の処理にもう工夫。

二席の「玉座」は、紅いマスタケとカタツムリを捉えた作品である。紅いマスタケと枯れ残った葉の緑が対比する玉座、そこへカタツムリが向かっている。背景の荒々しい幹には黄葉したツルアジサイの細い枝が這い、小さなキノコもある。役者がそろっている。

三席の「ひっそりと」は、山辺に咲くサンカヨウを捉えた作品である。少し花期を過ぎた状態であろうか。茶褐色の背景のなか、トップライト光が花弁の透明感を増幅し、雄シベの葯を浮き上がらせている。清涼感ある作品に仕上がっている。

鮫島和子賞の「朽ちゆく漁港で」は、塗装の剥げた岸壁の割れ目に根を張るハマナスを捉えた作品である。錆びたワイヤーや漁網が散在する防波堤の片隅で花期を迎えるハマナスの花からは強い生命力を感じられ、作者の着眼点と小道具の使い方の巧みさも伝わる。



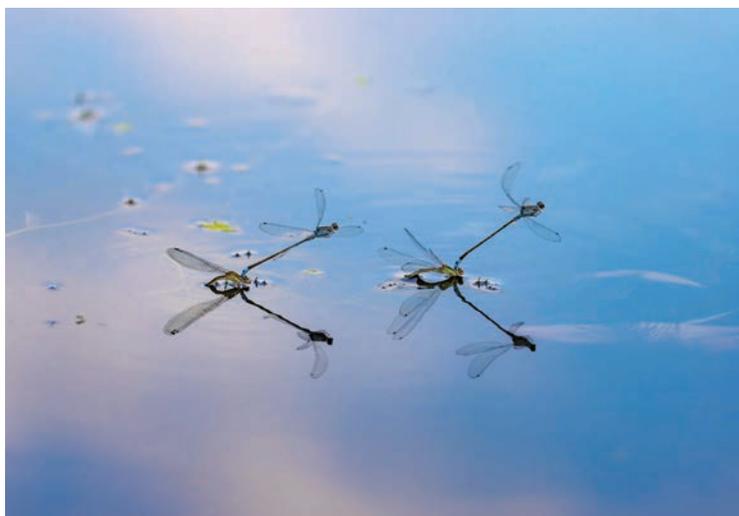
【動物部門 1 席】
虹に翔ぶ 今泉俊雄（釧路市）



【植物部門 1 席】 夢想花 網影悦子（十勝管内音更町）



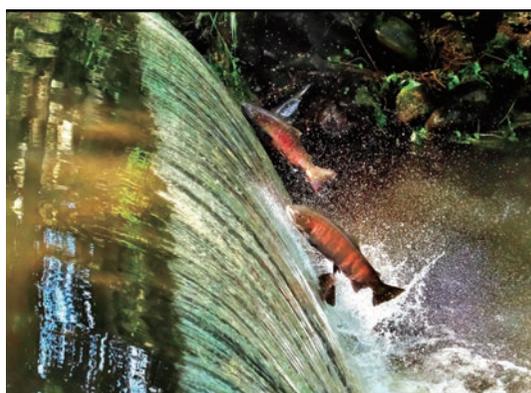
【動物部門 2席】 食べないで… 岩井郁美 (岩見沢市)



【動物部門 2席】 デュエット 中神由美子 (札幌市)



【動物部門 3席】
黄昏時 佐々木歩 (苫小牧市)



【動物部門 3席】
未来へ繋ぐ 出口博司 (帯広市)



【動物部門 3 席】
スカイダイニング 高橋大樹 (札幌市)



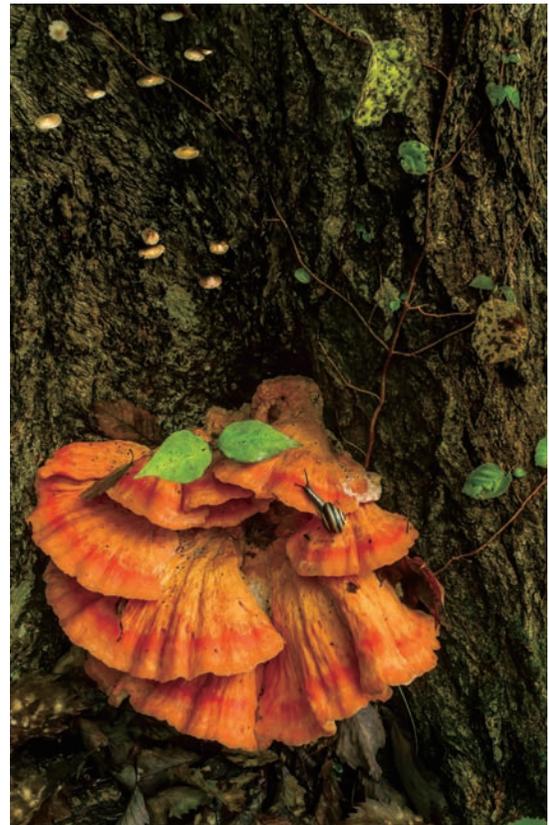
【動物部門 鮫島和子賞】
氷上のオアシス 田中かおり (札幌市)



【植物部門 3 席】
ひっそりと 佐野ミヨ (恵庭市)



【植物部門 鮫島和子賞】
朽ちゆく漁港で 東等和子 (釧路市)



【植物部門 2 席】
玉座 土田弘志 (渡島管内七飯町)



ファミリー
出口大芳（滝川市）



越冬家族
藤田典子（札幌市）



舞踏会
谷岡隆（日高管内新ひだか町）



森の軽業師
安孫子勝（江別市）



春の詩
西山豊洋（江別市）



流氷に佇むオオワシ
大塚達男（神奈川県鎌倉市）



肩寄せあって
多田和弘
（オホーツク管内置戸町）



雪の日のリフレイン
斉藤宏和（上川管内東神楽町）



バンジージャンプ
藤本卓哉（恵庭市）



着陸体勢
奥 睦志（千歳市）



誘惑
岡内孝一郎（滝川市）



シルエット
菅原久美子（赤平市）

【植物部門入選作品】



雨上がりの森の物語
輪島礼子（札幌市）



滴凍りて
中神由美子（札幌市）



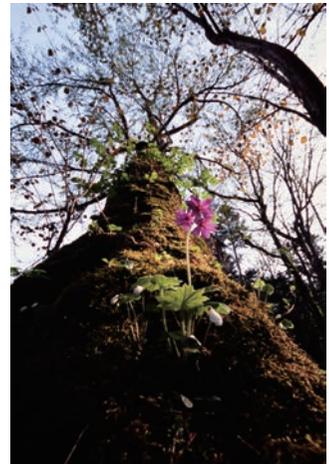
キラキラと輝く
河原典子（芦別市）



6月の森に咲く
浅野晴也（釧路管内弟子屈町）



秋のデコレーション
竹田啓子（釧路市）



共に生きる
阿部孝志（江別市）



秋彩
大鹿静彦（北見市）



初夏の訪れ
佐々木洋（苫小牧市）



湿原に咲く
村田浩一（十勝管内音更町）



苔に咲く
完山富江（東京都立川市）



森のファンタジー
大谷重夫（苫小牧市）

第31回夏休み 自然観察記録コンクール

北海道新聞社・北海道新聞野生生物基金・北海道自然保護協会の共催により、北海道教育委員会・札幌市教育委員会の後援を得て、「第31回夏休み自然観察記録コンクール」を開催しました。

入賞作品の公開展示は下記の日時・場所で行われました。

2024年10月29日(火)～11月4日(月・祝)
札幌市資料館2階ミニギャラリー
2025年1月5日(日)～10日(金)
札幌市円山動物園「円山動物園科学館ホール」

応募状況

募集テーマ 身のまわりの自然をよく見て作文や絵にくわしくかいてみよう

◎応募数 作品数 58点

1年(19) 2年(8) 3年(12)
4年(10) 5年(5) 6年(4)

◎学校数 19校

◎審査日 2024年10月1日(火)

◎審査 北海道新聞野生生物基金、北海道自然保護協会

受賞者・受賞作品

◎金賞 1点

中 耕生(苫小牧市立拓勇小学校2年)
「ほくが見つけた水辺の生き物」

◎銀賞 2点

佐藤 颯(札幌市立藻岩小学校2年)
「むしずかん」

長内智幸(札幌市立北陽小学校5年)

「円山公園の野鳥と生き物たち」

◎銅賞 6点

奥成宥伍(札幌市立藻岩小学校1年)
「かぶとむしのせいいかつ」

佐々木柚(恵庭市立恵庭小学校3年)

「かたつむりのかんさつ」

小関悠生(札幌市立信濃小学校3年)

「生き物かんさつ」

大江陽向(札幌市立豊園小学校4年)

「おばあちゃんちの畑の野菜」

吉田美里(網走市立網走小学校5年)

「今年の天気でい常だと思ったこと」

坂本颯人(千歳市立みどり台小学校6年)

「僕の昆虫物語」

◎佳作 11点

高橋芽里(恵庭市立松恵小学校1年)
「あさがおのかんさつ」

青木乃々花(札幌市立藻岩小学校2年)

「みどりコースのしよくぶつたち」

石塚優暉(札幌市立藻岩小学校2年)

「メダカ日記」

嶋田愛莉(札幌市立藻岩小学校3年)

「三笠のアンモナイトについて」

小島 進(札幌市中央小学校3年)

「道ばたのひよんなどころに生えている多肉植物」

坂本雅人(千歳市みどり台小学校3年)

「テントウムシのひみつ教えます」

赤塚直紀(札幌市立藻岩小学校4年)

「カブトムシのせいいたい」

小林蒼都(札幌市立あいの里東小学5年)

「鳥と木の関係」

太田彩萌(札幌市立藻岩小学校6年)

「金魚について」

金野稟平(札幌市立東橋小学校6年)

「エゾサンショウウオ新聞」

原 万琴(新ひだか町立高静小学校6年)

「この夏の山を見る」

◎学校賞 札幌市立藻岩小学校

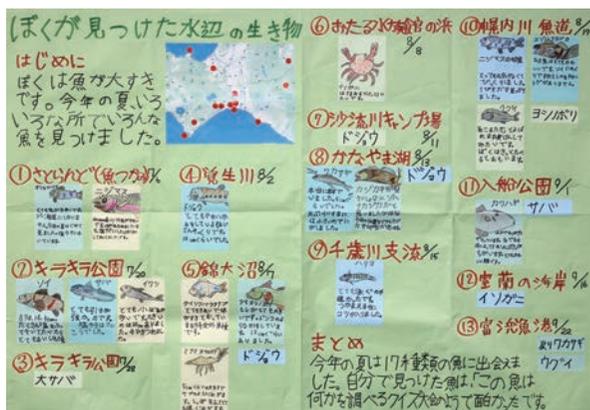
金・銀・銅受賞作品の講評

審査委員長 横山武彦

【金賞】「ほくが見つけた水辺の生き物」

魚の好きな中耕生さんは、今年の夏、札幌の「さとらんど」でオシロコマの魚つかみを体験したほか、道内の海岸や川、湖沼など12カ所のみた魚やカニ、エビなど出会いました。それらの17種について、北海道地図に

その場所を图示し、出会った生き物それぞれにスケッチと解説をつけて1枚のポスターにしました。スケッチはそれぞれの色・模様や形などの特徴が描かれ、解説にはそれらの大きさや見た目だけでなく、泳ぎ方や掴んだ時の感触、焼いて食べた時の感想も書かれています。作品からはそれらの生き物に出会った時の感動の大きさと、そこで新しく発見した喜びが滲み出ています。



金賞作品 「ぼくが見つけた水辺の生き物」

【銀賞】「むしずかん」

佐藤颯さんは、カブトムシやアオカナブン、エゾゼミなど12種の昆虫とカタツムリ・ど

じょう・アマガエルなど5種の動物、1種のきのこを「むしずかん」としてファイルにしました。それぞれのページには写真と採集場所とスケッチがあります。採集場所はおもに札幌市内でした。写真からは動物の好きな観察者がよく観察しているようすが見られます。また、スケッチはそれぞれの特徴をとらえたもので、観察者の感性の豊かさが感じられます。



銀賞作品「むしずかん」

【銀賞】「円山公園の野鳥と生き物たち」

長内智幸さんは、小学1年の時から毎月、円山公園で探鳥会に参加したり、家族で鳥の観察をして分かったことをポスターにしました。一つは公園内の場所により鳥の種類や行動が決まって見えたことでした。梅園の上空でトビやハイタカが円を描くように飛ぶこと

やその周辺の木々からキビタキやオオルリのさえずりが聞こえること。カラスがクルミの実を車にひかせて割ることやクマゲラが木に穴を開けてできた木くずのこと…などです。野鳥の生態について長期の観察記録を整理・考察することで分かることが浮かび上がるのは努力の成果であり評価に値します。



銀賞作品「円山公園の野鳥と生き物たち」

【銅賞】「かぶとむしのせいかつ」

奥成宥伍さんは、小学校入学前の夏にお父さんがもらってきたカブトムシの卵を育て、卵が成虫になり、死んだ後に標本にするまでを19枚の写真に撮り、その時々の様子を書き加えてファイルにしました。卵がツルツルしていたこと。孵化した幼虫が米粒二つ大から500円玉、そして小さなめのドーナツの大きさに成長していったこと。蛹になるときの幼

虫の色の変化。これらのことを記録できました。小学校入学式の日に羽化。サナギから出た成虫の羽が乾燥する様子。そのあとの成虫の行動なども観察できました。卵の孵化から羽化の流れの中で、愛情深く飼育し、それぞれの成長段階での特徴的な姿も写真に残すことができました。

「かたつむりのかんざつ」

佐々木紬さんは、カタツムリを飼ってみたいと、自宅近くの草むらのコケや小枝、公園の花壇のレンガの中にいたカタツムリを持ち帰って飼育・観察することにしました。体の作りや体を伸ばしたり縮める動きや食べ物に向かうときの動きも観察。卵を産む前には二匹のカタツムリが互いに卵を産む前に差し込む様子も観察しました。生まれた卵から出た子どもカタツムリの成長の様子や、キュウリやキャベツなど、どんな餌が多く食べられたかも記録してみました。食べたものによりフンの色が違うこともわかりました。観察して、卵の殻など硬いものも歯でガリガリと食べることもわかりました。

「生き物かんざつ」

小関悠生さんは、6種の昆虫、ミヤマクワガタ・コバネイナゴ・ダンゴムシ・クサカゲロウ・ナナホシテントウ・エンマコオロギを飼育ケースで飼い、観察しました。それぞれ別のケースで飼育し、同じ種類でも一緒に入

れて喧嘩するものはケースの中を模様替えしたり、一匹ずつ別のケースに分けて飼うなど工夫しながら飼育・観察しました。オスとメスを入れたケースで卵が生まれたときは卵だけを別の容器に移すなど、孵化した後も幼虫の成長を観察できたことは絵日記に記録できました。このように小関さんが昆虫の種類により生育する環境や食べるものが違うので、飼育にいろいろ工夫したことがわかりました。

「おばあちゃんちの畑の野菜」

大江陽向さんは、夏休みにおばあちゃんちの野菜畑の水やりなどを手伝いました。植えられていた多くの種類の野菜から、ナス科のナス・ミニトマト・ピーマン・トウガラシ・シヨクヨウホオズキとウリ科のキュウリ・マクワウリ・ユウガオ・ズッキーニの11種の野菜について調べました。水やりの仕方、うどん粉病の予防方法、収穫する野菜の色と栄養成分の関係やその働きも調べてみました。ユウガオの実からかんぴょうが作られることや食物繊維、カルシウムや鉄などの栄養もあることなども知りました。写真とわかりやすい説明をポスターにまとめた作品でした。

「今年の天気でい常だと思ったこと」

吉田美里さんは、2024年1月の吹雪の日から天気が気になって、毎日、新聞の天気図を見て、当日の天気に関する記事と一緒に切り抜きノートにファイルしました。8カ月

以上続けた天気観察で、低気圧や前線の動きなどから天気予想もできるようになり、今年の天気が異常と思ったことが幾つもありました。そのうち、次の4つのことをポスターにまとめました。①2月に14℃ ②3月下旬まで残る流水 ③4月に3日連続夏日 ④台風10号の動きが遅く本州で大雨続く。まとめとして地球温暖化との関係やこれらに対応すべきことについても自分たちのこととして考えています。

「僕の昆虫物語」

坂本颯人さんは、自由研究で昆虫について2年次から観察記録コンクールに応募してきました。4年次に「昆虫の歩き方の違い」、5年次には「昆虫の移動方法と足や羽の進化」について調べました。それぞれで新たな疑問も生じていましたので、6年次の今年はその疑問を解決するための実験を行いました。4年次での疑問がカブトムシのオスとメスの歩き方で、足の運び順が異なることが、オスとメスの体のバランスの違いと考えました。そこで、メスにオスの角をつけて歩かせることを試みましたが、結論が得られませんでした。また、5年次に残っていた疑問については、歩く、飛ぶなどが行動の主な動きの昆虫で、それぞれの移動の速さと距離を計測しました。昆虫の移動方法と、餌の取り方や運び方との違いもわかってきました。

北海道博物館
植物標本が語る生物多様性を
市民と共に次世代へ伝える

黒松内町ブナセンター
小さなまちの森・川・湿地
守り、伝え、活かすために

利尻町立博物館
明治時代から多くの研究者が
訪れた魅力の離島

帯広百年記念館・浦幌町立博物館・ひがし大雪自然館
3つの博物館の連携で探る
それぞれの「地域らしさ」

美幌博物館
地域住民と一緒に
自然を再生する博物館

根室市歴史と自然の資料館
生物多様性ホットスポット根室で
野生動物と人との共存を目指して

北海道に生息する野生動物植物と、
道内の自然史系博物館の関わり

大原昌宏

北海道大学総合博物館 特任教授

北海道には約1300の

博物館があり、そのうち約

50館が自然史分野を含む博物館

として数えることができます*。北

海道豊かな自然環境の実態を知るに

は、まず知りたい地域の博物館の展示な

どを訪ねてみることをお勧めします。

博物館は、社会教育施設の一つとし

て、幼児から高齢者まで、さまざま

な市民が教育を受けられるように、

わかりやすい言葉で展示が作られ

ています。それぞれの市町村の博物

館の自然コーナーの展示を見れば、

その地域の自然についての概要を知ることができるでしょう。

自然史博物館の使命は、①地域の自然を調査し、②その記録を残

し、③調査で知り得た結果を広く市民に伝える、ことにあります。「調

査・研究」、「収蔵」、「展示・普及」が博物館活動の基本です。最近

は、展示からさらに「観光拠点」、「普及から「地域の知的拠点」へと、活

動と役割は広がっています。





地域の自然を知るための出発点 自然系博物館

学芸員の現場レポート

北海道には登録博物館のほかにも北海道博物館協会に加盟し、自然系博物館に位置付けられる資料館、科学館、動物園など多くの施設があり、標本の収集や展示・研究のほか、地域の自然に関するセミナーやワークショップの開催などの活動を展開している。

調査や研究のほか、他館との連携、過去のデータの管理など多様な業務をこなす各地の学芸員による現場レポート。

自分の住んでいる地域に「どのような鳥がいて、いつの時期にどこに行けばその鳥に出会えるか」、そういった質問に答えを出してくれるのが博物館です。博物館には学芸員という専門家がおり、それぞれの専門の分野について調査研究を行っています。大学などの研究機関と異なるところは、その地域に焦点を絞って、自然環境や生物について詳しく調査をして、その結果を専門性のある大学生などにはなく、広く一般市民にわかりやすい言葉で伝えることが学芸員の大切な仕事です。ジオラマや映像などを用いて、その地域の自然環境や生物を直感的にわかりやすく理解してもらおうように工夫をしながら展示を作る、そして普及講座やセミナーなどを開催するというのが博物館学芸員に任されている仕事なのです。

今回のこの特集では、利尻、美幌、十勝、札幌、黒松内の地域から、それぞれ地域の鳥、昆虫、魚、樹木、植物といった生物や自然環境について、それぞれの学芸員に専門の立場から紹介してもらいました。北海道には、まだ未知の生き物が多くいることや、複雑な生物間の繋がり（ネットワーク）があることがわかっていただけだと思います。そして、魅力的なこの北海道の自然環境を末長く維持していくことの大切さと、博物館の展示や標本、そして学芸員という仕事の魅力を、皆さんと共有できれば何よりです。

※北海道博物館協会のホームページから、加盟館と自然史部門を持つ館の概数を抽出した。<https://www.hkma.jp/museums>

おはら・まさひろ 1961年、東京都生まれ。北海道大学農学院博士課程単位取得。博士（農学）。小樽市博物館学芸員、北海道大学農学部助手、同総合博物館助教授、准教授。教授を経て現在に至る。昆虫分類学を専門とし、主にアジア域のエンマムシ科甲虫の分類を行っている。これまで日本昆虫学会会長、日本甲虫学会会長、北海道自然史研究会会長、CISE ネットワーク代表を務めた。

北海道博物館（以下、道博）は、札幌の郊外、野幌森林公園の森に囲まれて建っています。北海道の自然・歴史・文化を幅広くあつかう総合博物館ですが、もちろん、動植物も守備範囲。ここでは、博物館のさまざまな活動と植物との関わりを、博物館の基本的な機能や社会的な役割という視点から、道博の例を中心に紹介します。

展示・教育普及

博物館と言えば最初に思い浮かべるのは展示でしょう。道博の常設展（総合展示）の生き物コーナーでは、残念ながら植物はあまり登場しません。植物標本（腊葉標本）は鳥類の剥製や昆虫標本と違って地味で少し（笑）、平面状なので生きている姿を想像しにくいのが欠点です。そのため、生き物同士のつながりを表現した情景展示というこのコーナーのコンセプトにはそぐわず、あえて植物標本は使わなかったのです。一般論としても、植物に関しては標本より美しい写真の方が来館者の受けはいいでしょう。とはいえ、写真だけでは本やウェブサイトで十分。実物を見られることが博物館ならではの価値です。そこで、定期的に内容を入れ替える部分（フローアップ展示）では極力植物標本も展示し、固定部分では植物の影が薄い憂さを晴らして（笑）います。

企画展ではさらに積極的に植物標本を見せています。2018年の「野幌森林公園生き物図鑑」では、壁一面に並べた植物標本の迫力が観覧者の心を捉えたようです。また、取材に来たテレビ局のリポーターの方から「アートみたいですね」という感想をいた

標本を集め、守り、後世に伝えていくことも博物館の使命 植物標本の美しさを最大限に活かした魅力ある展示を模索

市民グループと連携したデータ収集と過去の記録の統合から
野幌森林公園の植物相を解明。
地道な調査と標本の収集など基礎的な博物館活動に加えて
博物館同士のネットワークや標本のデジタル公開も推進。

北海道博物館 水島未記

みずしま みき 1968年、大阪府生まれ。北海道の自然の実態やその楽しさについて人に伝える仕事をしたくて、学芸員の仕事を選びました。植物生態学から入り、ヒトと植物の相互関係について探る「民族植物学」に足をつ込み、広く浅く博物館活動に関わってきましたが、近年は博物館で標本を集め、後世に受け継いでいくことの大切さをあらためて意識するようになりました。北海道博物館北海道研究センター副センター長（自然系）。

だいたことは、それまで意識していなかった植物標本の美しさに気づきつきました。24年のこの企画展では、孫田敏氏による植物の「スキャンアート」と植物標本を組み合わせ、植物の形が多様性や面白さにスポットを当てました。アートと同列に標本を「鑑賞」していたかどうかという試みは成功し、普段より1点1点の標本をじっくり見る観覧者が目立ちました。標本の持つ力をあらためて実感しました。

博物館ではさまざまな普及教育プログラムも行われますが、植物に関わるものとしては自然観察会が代表的です。道博は野幌森林公園の中にあるため、主にこの森で季節に応じてテーマを決めた観察会を開催しています。植物を題材にしたものでは、木や草の実を探して種子散布様式の多様さを伝える観察会が人気です。

調査研究

展示や教育の基盤となるのが調査研究です。道内には植物分野の学芸員がいる博物館が数館あり、それぞれ地域で植物相や植生、植物生態などの調査を行っています。道博では、野幌森林公園の生物相を網羅することを目標とした「生物インベントリ調査」を10年以上続けています。この地域では大正時代以来何度か大規模な植物調査が行われてきましたが、道博の調査で過去に記録のなかった植物が107種も記録され、身近な自然でも調べ尽くされていなかったということを実感しました。その後、過去の記録との照合作業を進めることで、最終的に

標本の収集・保存
多くの標本を集め、大切に保管して後世に伝えていくのも自然系博物館の重要な役割です。実は標本のコレクションこそが、博物館の心臓部なのです。そのため、保管する収蔵庫の温湿度をできるだけ一定に保つ、害虫の侵入を防ぐなど、標本の劣化を防

この地域で記録された種子植物の種数は747種となりました。野幌森林公園のようによく知られた場所でも、「何種の植物があるの?」という素朴な問いに答えるのは意外と難しいものです。曲がりなりにも、その答えを出せたのは大きな成果でした。多くの館では調査研究の成果を発表するため『研究紀要』などの刊行物を出版しています。

市民・地域との連携
現在の博物館では、市民との連携・協働が大切です。展示を見せる博物館とそれを見る人という一方

ぐためさまざまな努力をしています。標本は、過去の自然環境を記録した「タイムカプセル」とも言えます。例えば、北海道大学総合博物館には明治時代に採集された植物標本が残されており、当時の植物相や植物の分布を知る手がかりとなります。標本の研究から新種が見つかることもあります。近年では標本からのDNAの抽出・分析も普通になりました。標本の価値は数十年、数百年経っても無くなるものではなく、新しい技術によつて新しい価値が生み出される可能性もあるのです。

野生生物基金によるこのイベントには、私も含め道内の植物分野の学芸員の多くが実行委員や地域アドバイザーとして運営に協力しています。また、学芸員が中心となって、博物館の利用者でチームを作って参加する館も少なくありません。

通行の関係ではなく、一般市民が博物館活動のさまざまな部分に参加することで、博物館にとっては活動の拡充、市民にとっては学びの充実につながるなどのメリットがあります。並行して近年、市民科学の重要性が目立っています。一般市民が専門家と協働して科学的調査や研究に参加する活動のことで、多くの博物館は市民科学の中核としての役割も果たしています。市民科学による大規模調査の好例が、ご存じの「北海道フラワーズン」です。北海道新聞



クローズアップ展示での植物標本



企画テーマ展「野幌森林公園園生き物図鑑」



企画テーマ展「北海道樹木万華鏡」



二酸化炭素による標本の殺虫処理



北海道博物館研究紀要の表紙

先ほど紹介した野幌森林公園の調査も市民科学の成果です。市民グループ野幌森林公園植物調査の会と連携して行い、植物の探索から採集、標本の製作まで担っていただきました。企画展「野幌森林公園生き物図鑑」では展示する植物標本の選定から参加していただき、各メンバーが自分で採集した「お気に入り」の標本を選んで展示しました。

博物館同士のネットワーク

複数の博物館の連携も重要です。23年には、NHKのドラマの影響で牧野富太郎と植物標本の



市民との連携（展示用にお気に入りの標本を選ぶ）



6館による合同展示「押し花の押し花～牧野富太郎と植物標本～」

知名度が高まったことにちなみ、植物分野の学芸員がいる道内の6館が合同で植物標本のミニ展示を開催しました。釧路市博物館の学芸員の呼びかけで実現したこの合同展示「押し花の押し花」は、6人の学芸員がそれぞれ「押し」の植物を標本で紹介するという企画でした。組織や地域の垣根を越えたこの連携企画は、今後ますます盛んになるであろう博物館ネットワークの先駆的な事例になると思います。

デジタル・アーカイブ

デジタル技術の発展により、博物館の活動も新たな展開を見せています。標本のデジタル化とオンライン

イン公開は、標本をより広く活用できるようにする取り組みです。道博でも植物標本の高精細なデジタル画像撮影を行うためのシステムを導入しました。近年採集した標本はほぼデジタル化が完了し、ウェブサイトで公開しています。

おわりに

標本の収集・保存、調査研究、展示と教育普及、そして市民との連携。これらの活動を通じて、博物館は北海道の植物の価値を人々に伝え、未来へと継承する架け橋となっています。自然の中に足を運び、北海道の植物の魅力を直接感じるとともに、博物館を訪れ、標本や展示を通じて植物の多様な世界をのぞいてみてください。そして、博物館との協働に参加して、北海道の自然を守り、活かす取り組みに加わっていただければ幸いです。



植物標本デジタル化システム



注) 北海道博物館 収蔵資料検索
<https://jmapps.ne.jp/hmcollection1/>

小さなまちの森・川・湿地 守り、伝え、活かすために

国の天然記念物指定100周年を迎える北限のブナ自生地「歌オブナ林」
道南では希少な低地のミズゴケ湿原「歌オブナ林」

魚類の回遊を妨げる人工構造物のない清流「朱太川」
これら自然豊かな地域資源を生かし守っていくための役割とは？

黒松内町の魅力あふれるフィールド、森・川・湿地

北海道黒松内町は、人口2,400人ほどの小さな町です。黒松内町が位置する渡島半島のくびれ部分、黒松内低地帯は、日本の冷温帯を代表する樹種「ブナ」が自然に分布する北限域にあたります。JR黒松内駅から車で5分ほど走ると、国の天然記念物「歌オブナ自生北限地帯」につながる散策路の入口があります。通称、「歌オブナ林」。入口から歩いて30分ほどで、ブナの巨木が立ち並ぶ原生的な森を目にすることができます。人の暮らしの、すぐおとなりに原生林、というのがこの町の大きな魅力のひとつです。

町のシンボリックな歌オブナ林をはじめとする、北限のブナ林の他にも、地域内には魅力的なフィールドが揃っています。北側の日本海・寿都湾に流れ込む清流「朱太川」は、その流域の広がりが町の境界とほぼ等しい二級河川です。朱太川の本流には、

黒松内町ブナセンター 永田 優

ながた ゆう 1996年、岩手県盛岡市生まれ。北海道大学農学院修士課程修了。環境コンサルタント会社勤務を経て昨年より黒松内町ブナセンター学芸員。学生時代は水草の研究をしており、湿地生態系の面白さにのめりこむ。黒松内に来てからはブナ林の美しさや山菜とり、清流の魚類観察に開眼。趣味は登山、自然散策、鳥見など。

黒松内町企画環境課 高橋興世

たかはし こうせい 1965年、北海道江別市大麻生まれ。北海道大学理学研究院博士課程修了。理学博士。黒松内町役場企画環境課上席主幹。1994年に学芸員採用され町立ブナセンターの首席学芸員、センター長を務める。2009年に事務職へ異動。その後一貫して生物多様性・環境保全・新エネルギーを担当して現在に至る。黒松内町生物多様性地域戦略策定、自然共生サイト登録、北海道大学農学研究領域との包括連携協定、パタゴニア日本支社・キャンパーズ&アングラーズ・朱太川漁協との連携協力4者協定などに携わる。博物館活動とは距離があるが、今でも自然史博物館を創出する妄想を抱いている。

魚類の上下流方向の移動を妨げる人工構造物がありません。そのため、アユ、サケ、サクラマスといった通し回遊魚が、寿都湾から朱太川本流を通り、支流にまで川を遡って産卵し、孵化した次世代が今度は川を下っていきます。このように連続性の高い河川は、ダム建設など河川改修の進んだ現代の日本では非常に貴重な自然といえます。

もうひとつ、最終氷期最寒冷期の約2万4千年前から形成を始め、約5千年前から泥炭を蓄積し続けてきた「歌オブナ林」は、農地開発を辛くも免れたミズゴケ湿原です。ミズゴケが優占する低地の湿原としては、国内では南限域にあたります。モウセンゴケやツルコケモモ、ワタスゲなどの湿原ならではの植生が現存しており、植生と水位のモニタリングが継続されています。

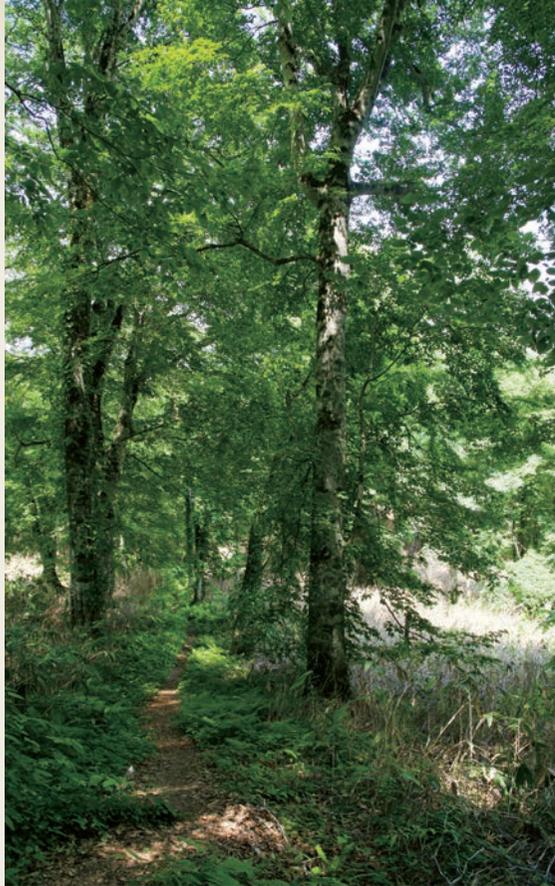
これらの自然・森・川・湿地は、研究や遊びのフィールドとしてはもちろん、環境教育の教材や観

光資源としても、黒松内町にとって大切な財産・資源です。

自然環境を貴重な宝とし、持続的に利用するため、黒松内町は自治体として自然環境の保全に向けた政策・ソフト事業を積極的に進めてきました。1996年には生物多様性をテーマとする研究への助成事業が発足し、2025年現在まで続いています。12年3月には「黒松内町生物多様性地域戦略」を策定し、生物多様性の保全と再生、活用に関する地域戦略を他の自治体に先駆けて打ち出しました。さらに23年10月には、歌オブナ林(5ha)と町有林添別ブナ林(51ha)の2か所が環境省の自然共生サイトに登録されました。このように、地域の自然を守り活かさんとする町の姿勢に対して、学芸員

職はどのような貢献ができるでしょうか？

ブナセンターの機能と役割



歌オブナ林

もらえるような専門の人員体制があることも、大きな特徴です。

ブナセンターは93年の開館以来、黒松内の自然を体験・学ぶ場として一般向けの講座や子供向けのプログラムの提供に力を入れてきました。また、歌オブナ林の町民参加型調査も様々なテーマで実施してきました。例えば、草本類の開花時期を調べる「花ごよみ調査」、ブナの結実数を調べる「ブナ種子落下数調査」は現在まで約30年間続いており、貴重な長期観測データとして蓄積されています。

節目を迎える歌オブナ林。この先も大切にされるためには？

さて、町のシンボル・歌オブナ林は、国の天然記念物指定100周年という節目を、2028年に迎えます。歌オブナ林ではこれまでに、先に述べた町民参加型調査や研究助成による調査研究の促進、加えて10〜15年には東京大学との協働プロジェクトといった、生物相の調査・研究が数多くなされてきました。しかし、それぞれの調査結果は孤立・散在しており、現在これらの情報すべてにアクセスできる人は限られています。こんなに調べられ、蓄積されてきた貴重なデータが、うまく利用されないというのは実にもったいないことです。散在している生物

相データを整理し、誰でも簡単にアクセスできる状態にすることが、歌オブナ林や地域資源の活用に必要なことであると感じています。近年、「サイエンスミュージアムネットのせう」によって国内の

自然史標本の情報が、「GBIF (Global Biodiversity Information Facility)」によって世界中の生物相データが、世界のだれでもアクセスできるように整備されてきています。このようなシステムを利用しつつ、実際にそのデータを使って分かりやすくまとめたり比較して発信していくことが、地域資源の価値向上や保全につながる大きな一歩になると考えています。一方で、人の心を動かして自然を大切に思う気持ちを育むことも、地域の自然資源保全につながる大事な道です。人の価値観が多様であるように、自然の価値も生物相だけではありません。歌オブナ林の価値や貴重性は、ブナが守られてきた歴史や、それを象徴する巨木ブナそのものから肌感覚で伝わってくるものでもあるのです。

生物相データによる地域資源の価値向上と、肌感覚に訴える貴重性。どちらも、歌オブナ林が100周年を超えてこの先も人々に大切にされていく上で必要なものです。さらに、歌オブナ林をはじめとする地域の自然を守り活かさんとする行政の姿勢を、町の人に理解してもらう橋渡しの役目というのも、自然史系の学芸員がこの小さな町に採用されている理由のひとつであると思っています。人と学術と行政をつなぎ、お互いの意見を交え、地域がよりよい自然環境の保全・活用方法を共にさぐっていけたら、ベストであると考えています。

高橋がかつて所属し、現在永田が所属する黒松内町ブナセンター（以降、ブナセンター）は、町営の博物館的施設です（博物館法でいう正式な「登録博物館」や「指定施設」ではありません）。ブナセンターの扱う博物館資料は「まちの自然―森・川・湿地―」や「文化・歴史」そのもの。地域全体を野外博物館として捉え、ブナセンターはその拠点であるという理念のもと運営されてきました。そのため、いわゆる博物館の本分である資料の収集・管理の優先順位は低く、現在のところまとまった標本といえるものは、貝化石を主とする瀬棚動物群のみです。加えて、ブナセンターには3つの工房設備「木工房」「陶工房」「食工房」があり、町民や来館者の創作意欲を促す用途があることも、ほかの博物館とは異なる点です。また、1999年には学校向けの窓口となる「学校教育部」を設立しており、地元小中学校の授業や町外からの宿泊研修に対して、黒松内の自然を体験・学習して

地域の自然の大切さを、そこに住む人が認識し合い その素晴らしさを多くの人に伝えることが博物館の役割

かつては多くの植物・昆虫研究者が訪れた利尻島。
だが採集された多くの標本や情報は都市部へ持ち出された。
それらを地元に残し活用するため、研究助成制度を導入し、
島外研究者との連携を深めている。

利尻町立博物館・学芸課長 佐藤雅彦

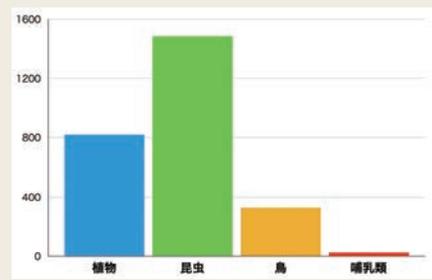
さとう まさひこ 1966年、静岡県生まれ。静岡で富士山を眺め育ち、北海道の昆虫学教室にて虫のみならず、様々なことを教えてもらう。卒業後、利尻富士を仰ぎ見る現職につき、島の歴史から自然までなんでも担当。

ちいさな島の虫、人、そして博物館

普段なにげなく見ることがある生き物の中でも、昆虫は極めて高い多様性を誇り、いまでも初記録や新種が次々と見つかるグループです。たとえば、筆者が住む利尻島では、これまで同島から記録された他の生物と比べてみると、昆虫の記録種数は最も多くなります。新しい発見が続くということは調査がされていないことか、と思われる方もいるかもしれませんが、もともと多様性の豊かさに調査が追いついていないというイメージに近いかもしれません。北海道内には昆虫を専門とする学芸員が配置されている博物館や昆虫館もありますが、当館のような地方の小規模館では、ありとあらゆる分野を扱いながら、草刈りから受付、掃除、事務処理と、まさにワンオペ学芸員にとって昆虫だけに時間を割くことが難しい毎日が続きます。それでも、筆者が30年以上もこの博物館とさいはての島の自然を愛してやまない理由は、離島ならではの生物相解明の手応えと魅力があったからです。本稿では、ちいさな島とその自然を追い求める人々を、博物館という視点から綴ってみたいと思います。

漁師も学者もめざした島

利尻山に初めて登山路が拓かれたのは、諸説あるものの明治20年頃と考えられています。利尻島における本格的な生物相の解明がいつ頃から始まったのかははっきりしていませんが、おそらく同じ頃から開始されたのではないかと想像しています。植物分野では1888年(明治21年)の堀正太郎や、93年(明



利尻島およびその沿岸の代表的な生物の記録種数の比較。過去の文献や独自記録などから集計したものだが、集計年が異なるほか、外来種・絶滅種が含まれていたり、精査が必要なものも一部含まれている。昆虫は近年のデータを追加すると更に増加していることが予想される

治26年)の宮部金吾による調査があります。松村松年が日本最初の昆虫学教室を札幌農学校で開いたのが96年(明治29年)ですから、おそらく植物と同様、この時代から本格的な昆虫類の調査も始まったのではないでしょう。たとえば、利尻島で最初に採集されたカワカミハムシは、松村松年によって1911年(明治44年)に記載論文が発表されており、同教室出身の土井久作も24年(大正13年)に本島を訪れひと月ほどの滞在調査を行い、リシリヒトリなどを発見しています。

さて、この時代の利尻島はどんなところだったのでしょうか。明治時代後半の利尻は鯨漁で大変栄え、一時期の不漁があったものの、春鯨の漁獲高は15年(大正4年)にピークを迎えます。そのため、最北の離島という環境でありながら、北海道の内陸部と比較しても訪れやすい場所であったこと、そしてなに

よりも標高1721mの山を有する北海道最北部の離島という環境が、各地の研究者たちをこの時代からして呼び寄せる大きな要因となったと思われる。また23年（大正12年）に行われた小樽新聞社による「北海道三景」の読者投票では、定山溪と洞爺湖を抜いて利尻富士が一位となり、当時でもその知名度は研究者のみならず高かったといえます。

利尻町が博物館設立に踏み出した直接のきっかけは、77年（昭和52年）の亦稚貝塚またちがひづかの緊急発掘調査でした。出土遺物や、すでにその頃には急速に失われつつあった鯨漁資料などを中心に、80年（昭和55年）、利尻町立博物館が開館しました。当初は人文系学芸員一名でしたが、その後、自然史系学芸員として筆者が2000年（平成12年）から配置されました。

自然や文化が奪い去られる？

博物館で働くようになってまず感じたことは、想像以上に古くから利尻島の自然は調べられてきたことに驚く一方、標本はもろろん、そのような調査が行われた情報や記録がほとんど地元に残されてこなかった、ということでした。苦労して採集された大切な標本は島を離れ、その情報は学会誌などで発表されてしまえば、もう島の人にとっては自分の島のことなのに、その情報を気軽に手に取れなくなってしまうのです。

以前から同じようなことを感じていた方に、利尻島出身の教員であった松野力蔵さん（1911年（明治44年）生まれ）がいます。植物学者・館脇操が利尻島で講演をしたことがきっかけとなり、松野さんは



明治時代から調査が進められてきた利尻山

利尻島の植物の魅力にのめり込み、島中の植物を探し求め歩き回り、当地が国立公園に昇格する際には写真集を出版したり、植物目録をまとめたりしました。松野さんがその著作や筆者への私信で述べていたことは、地元の自然の素晴らしさに多くの島民が気付けないことへの悔しさのほか、地元の植物

がどんどん都会に持ち去られ、中央のみで研究がされて地方が置いてけぼりにされていることがもどかしく、「文化や自然まで持ち運ばれては田舎に生きる生き甲斐さえもなくなるのではないだろうか」と述べていました。おそらく松野さんは、地元の自然の大切さをそこに住む人がきちんと認識するとともに、地元でその自然の素晴らしさを明らかにし、それを多くの人とその風土ともども共有する姿を望んでいたのではないかと、想像していますが、このことは、まさに地域の博物館が担う役割そのものと言えましょう。

そこで、地元になるべく標本や情報を残していく仕組みとして、研究助成制度を92年（平成4年）からスタートさせました。利尻島調査研究事業と呼ばれる本事業では、北海道の町村レベルでは最初期のものといえ、来島調査時には地元で普及活動を実施していたただくほか、成果は博物館の紀要に投稿してもらっています。現在は民間団体に活動は移行し、助成額は「雀の涙」ほどのものですが、その分、助成金を目当ての方というよりは、利尻島にそもそも魅力を感じている熱意のある方の応募が多いのが特徴です。お金の切れ目が縁の切れ目となることもなく、島にその後も通い続け、その解明に力を尽くしてくださっている方も少なくありません。昆虫類の採用では、これまでにシヨウジョウバエ工、借孔性ハチ類、ヒラタムシ上科、の調査が行われています。

虫を求め人は旅する

地方のちっぽけな博物館は「井の中の蛙」かもし

れません。しかし、井戸の水が満ちていれば、空の高さに思いをはせたり、時に井戸水を飲みを集まる渡り鳥たちから空の広さを知らされ、さらには井戸の深さを彼らに伝えることもできます。このことは、地方博物館ならではの魅力の一つでしょう。ポツンと井戸にいる私たちのような蛙に外の世界を教えてくださいるのは、外からやってくるナチュラリストや研究者らで、彼らは人が勝手に決められた境界などはものともせず、自分が興味をもった対象を追い求める熱意溢れる方たちばかりでした。

私が勤め始めた頃、利尻山の甲虫相調査にいらしていたのが保田信紀さん（大雪山国立公園層雲峡博物館）でした。保田さんとは調査に同行したり、昆虫の話などをしたこともありましたが、「博物館とはなんぞや」というような話をほとんど交わした記憶はありません。しかし、地域にとらわれがちな地方学芸員に、井戸から飛びしてみると、その後ろ姿で教えてくれた方の一人でした。それ以降、私も地元だけでなく、その周辺地域の調査などにも出かけ、まだ誰もが見つけていないようなものであれば記録や標本として発表し、可能であればそれをその地元に残すようにしてきました。

来島される虫探しの達人たちには、研究を生業とする方以外もいて、博物館に顔をだしてくれる方もたくさんいました。甲虫類、ガ類、水生昆虫、トンボ、直翅目、アブラムシ、などなど、その分野も様々な学校の先生からお医者さんまでと、職業も様々。しかし、一貫して虫への情熱は同じです。調査に同行した著者にとっては、聞くも初めての専門外の知識



古くから調査がされているちいさな島にもかかわらず、まだまだ新しい発見に出会える利尻島。リシリノマックレイセアカオサムシは2004年に発表された固有亜種



「海になにかたくさん浮かんでいる」との連絡で2022年に見つかったサモアオヨギスリカ（上：雌、下：雄）。本件のように島民からの情報で利尻島の初記録となる種も少なくない

を、いわばその魅力にとりつかれた方々に地元のフィールドとからめて熱く語られるわけですから、これ以上の最高の講義や実習はありません。時々、島民たちもいっしょに調査に参加したりと、生物相の解明以上に、地元への普及活動にも大いに貢献していたいただきました。このような方々は限られた休暇を使いながら、何度も調査にいらしていただき、地元で標本やその成果を提供してくださったことで、本島の昆虫相は小さい島ながらもここまで解明が進んできたといえますよつ。

ところが近年、そんな方々が島を訪れなくなりつつあります。鳥に昆虫がいなくなりつつある：

というようなニュースを近年聞いたことがある方もいると思いますが、私はそれ以上に彼らのような人々と島で出会えなくなりつつある世の中の方を心配しています。その原因は、おそらく読者のみなさまが日々の世の中の出来事を感じていることにつながるものと想像していますが、せめて博物館ぐらいいは、今後も自由で多様な人々の好奇心をじっくりと育める、素敵な小さな井戸であり続けたいと願っているのです。

謝辞・利尻の古い昆虫記録についてご教示いただいた大原昌宏さん（北海道大学・総合博物館）と竹本拓矢さん（北海道大学・農学院博士課程）に心より感謝申し上げます。

はじめに

私たちが自然を知るとき、どんな要素が大切でしょうか？ 同じ北海道でも道南と道東ではイメージが違います。十勝地方でも、例えば帯広らしい自然と言ったとき、何を見てそう感じるのでしょうか？ 2023年夏に帯広百年記念館で実施した特別企画展「十勝縦断生物誌」(23年8月5日～9月10日)は、その見方から生まれた、山地から海岸までの十勝の自然の「見え方」について深めた展示です。これは帯広百年記念館・浦幌町立博物館・ひがし大雪自然館の自然史系学芸員が協力した初の試みでもありました。この企画展の視点や意義、十勝の自然や博物館の連携について紹介します。

帯広百年記念館 池田亨嘉

いけだ ゆきよし 1963年、檜山郡江差町生まれ。エゾリスの会 調査幹事、北海道爬虫両棲類研究会会員。

ひがし大雪自然館 乙幡康之

おつばた やすゆき 1983年、東京都生まれ。2010年より上士幌町ひがし大雪博物館(現ひがし大雪自然館)学芸員。専門は自然地理学。十勝の地形・地質や第四紀、北海道のコケ植物(蘚苔類)について調査研究している。近年は上士幌町のキタサンショウウオの保全についても取り組んでいる。

浦幌町立博物館 持田 誠

もちだ まこと 1973年、神奈川県生まれ。北海道大学総合博物館、小樽市総合博物館、帯広百年記念館を経て、2015年より浦幌町立博物館学芸員。専門は植生学と博物館学。地域の生物多様性や自然環境保全、自然教育に、博物館や学芸員が果たすべき役割、できることは何か?を模索中。

3つの博物館の連携で語る自然の「地域らしさ」
十勝の学芸員たちが試みた新しい取り組み

十勝地方の3地域の博物館で試みた「十勝縦断生物誌」。

地形や生物相などの違いがそれぞれの「らしさ」につながる。

その「らしさ」が地域の自然環境への探求心を高めるきっかけに!



十勝は生物の交差点



企画展ポスター

十勝の自然環境の特徴

十勝は14振興局中最大の面積(約10,800km²)を持ち、北海道島の14%に相当します。西・北・東の3方を日高山脈、石狩山地(大雪山系)、白糠丘陵及び阿寒山地に囲まれ、南は太平洋に面している広大な盆地状の平野です。地形を俯瞰すると、西から東に向かって、①山地、②台地(平野)、③丘陵、④山地が並び、火山は北部に限られます。河川では十勝川

水系が83%を占め、全河川が太平洋に注ぎます。これらの特徴から、十勝は自然環境的にも地域的にも平野を中心としたまとまりのある地域であることがわかります。

「らしさ」をあぶり出す

十勝の地域ごとの自然の「らしさ」の違い。それは帯広百年記念館・浦幌町立博物館・ひがし大雪自然館の常設展示に現れています。帯広百年記念館では十勝平野（台地）を中心に、浦幌町立博物館では白糠丘陵や十勝川の河口域（丘陵と低地）について、ひがし大雪自然館では大雪山や東大雪地域（高山と山地）について展示を展開し、それぞれの地域に分布する代表的な生物の資料を展示しています。

地域の自然の違いはそれぞれの学芸員の自然観にも現れています。例えば、「湿地の植物」について、3館の学芸員で話をしたらどうなるでしょう。アカエゾマツ、イソツツジ、ミスバシヨウがセツトで見られる大雪山周辺の湿地と、ハンノキ、ヤチボウス、ザゼンソウなどが見られる十勝平野の湿地を想像する学芸員に分かれ、湿地を構成する植物の違いが自分の「湿地らしさ」に反映されていること



森林伐採後の処理



イチゲは地域の顔



丘陵では現在も林業が続く



展示のバックは森林植生など全景を貼る

に気づくでしょう。一方、ヒメイチゲは十勝の多くの湿性植生に見られることを共有し、「十勝らしさ」の一端を発見します。イチゲ類はポスターにも使っており、地域と対応するデザインで象徴的に示されています。また、アオカナブンやアマガエル、ヒガシニホンアマガエルを糠平では見たことがないといく他の地域の学芸員が驚いたりすることも、各々の持つ「地域らしさ」の違いを表しています。

気候の影響、標高、湿地や河原などの立地、氷期・間氷期サイクル、地史的な要素、人による攪乱…これらが生み出す複数のストーリーが交錯し、地域の生物種の「組み合わせ」をつくります。これを見続けることで「十勝平野らしさ」とか「浦幌丘陵っぽい」などの体感的な記憶が生成されるのかもしれませんが、こうした十勝の自然の「地域らしさ」に着目したのが十勝縦断生物誌です。事前に3館の学芸員でディスカッションを行い、地形や生物に印象付けされる自然景観を「地域らしさ」と考えました。おおきな景観の違いから十勝を①山地 ②丘陵、③平野（台地）、④低地（河口域）の4つの環境に区分し、各地域で特徴的な景観とそこに生息する生物群の「組み合わせ」に着目した展示を試みました。大きな景観写真ははじめに示し、森林、低木、林床の植物種を組み合わせて背面に、その前面に動物標本を展示する形で、実際の景観イメージを展示室内に再現しました。

動物の展示を考える

動物の展示はその景観に象徴的な種を展示しました。例えば丘陵では大量のチョウ標本を展示しま

した。特に長流枝内丘陵は有名なチヨウの産地であるため、そこに標本を多く展示しました。丘陵は大正時代から続く林業により成長と伐採を反復し続け、植物種数や飛翔空間が多く維持されて来たためチヨウが豊富なのですが、その証拠となる写真資料と大量のチヨウ標本によって体感的に印象付ける展示としました。別な展示方法では『北海道東部浦幌地域に生息するヒグマ集団の遺伝子構造解析』(森 佐藤、伊藤)②013「哺乳類科学」を題材にしました。浦幌のヒグマには日高北東部から大雪南縁部のメス集団、日高北東部より白糠丘陵にかけて広く分布するオス集団、白糠丘陵の東部の集団、白糠丘陵の西部(浦幌をルーツに持つ遺伝子集団)がありました。これを解説と3体の剥製で表現しました。1体は帯広の昭和50年代採集の剥製、他2体は浦幌の大正と平成に採集したのを使い、3体を3角状に配置しました。解説を読むとき3頭に囲まれるよう配置しました。浦幌地域がヒグマの交差点であることを体感的にも解説できたと考えています。

これらの剥製が意図せず大正、昭和、平成の標本であることや、大正時代の標本は現存する十勝最古のヒグマ剥製であり、この標本に出現から駆除までの顛末が付記されていることも貴重でした。共同開催により、大きな展示室を持たない館が、価値ある資料を大きな会場で展示できる、という意義は共同開催の「隠れテーマ」として重要です。

展示以外の展開

企画展に関連して、帯広百年記念館の

YouTubeチャンネルで、企画ディスプレイショーや展示作業も含めた解説動画 (<https://www.youtube.com/watch?v=1E9t-Edg0G>)を複数配信しました。動画視聴後たと展示が読み解きやすいと評判でした。このほか、十勝の北部と南部の自然観察会を実施し、地形、地域の成り立ちと生物群集に関連づける見方を体感しました。企画展終了後は十勝縦断生物誌を振り返る講座を実施し、この展示の意義について紹介しました。

企画展を通して見えてきたもの

この企画展で述べた価値観は、十勝3館の学芸員が地域の自然を長年観察調査して積み上げた経験から得た「印象」を、形にして伝えようとしたものです。種々の要素を十勝の自然らしい形に組み立て、「地域らしさは複数のストーリーの交差点で生まれている」という見方を提示できたのは、生物多様性の理解にも通じ、有意義だったと思います。

来訪者からも、なんとなく感じていた自然の印象がはつきりした、解像度が上がったなど、これまでの企画展と異なる感想をいただきました。動画の中で持田学芸員が「十勝はいろいろな地域との接点を平野を縁取るように持っている。」と語りましたが、このような自然のとらえ方で、他の地域の自然も読み解けるのではないのでしょうか？

広い北海道に点在する博物館が、地域を意識して協力することで、普通だと思っていた景観の特徴に気がつくはずです。例えば旭川から南富良野、深川から栗山、噴火湾一周、について学芸員がディスプレイオンするだけでも意義があると思います。大切なのは、分布調査やライフルリストではなく、「自然の組み合わせで表現される地域らしさ」という観点を持つことだと思えます。

私たちはこのテーマと手法には、自然の地域性について誰もが理解を深められる可能性を見出しています。トライしてみてはいかがでしょうか！



ヒグマ展示



動画のひとコマ



自然観察会のようす

自然系博物館

札幌のシマフクロウ

美幌博物館は、北海道東部のオホーツク海側の美幌町にある、自然や歴史、芸術を楽しめる総合博物館です。館内には道内最大のオホーツクの自然を再現したジオラマや、学芸員が手づくりした展示室、さらに「なんでこんなすごい絵があるの!？」と言われる名画も展示しています。私は、この博物館で脊椎動物を担当し、淡水魚の保全と生態について研究しています。夢は、北海道に生息する淡水魚の図鑑をつくることで、魚の収集や水中写真の撮影をライフワークにしています。普段は美幌町で活動していますが、時には札幌近郊でも、魚を捕まえています。その際には必ず札幌市内に繰り出し、登山用品店や

博物館の資料から見えてきた自然環境の変化
自然再生の道しるべは
博物館の標本ラベルにある

たくさん魚たちが海と川を自由に移動し、シマフクロウも棲んでいたかつての森の再生を目指す。地域住民と博物館の取り組み。



シマフクロウ (北海道大学付属植物園博物館展示資料)



1987年の川の様子



2010年の川の様子

美幌博物館 (美幌町教育委員会 博物館課) 学芸主査 町田善康

まちだ よしやす 1980年、東京都生まれ。幼少期から、川遊びが大好きで、毎日のように川に出かけていました。当時、ハマった遊びがアブラハヤ釣り。友人と一日に何匹釣れるか競い合ったことを今でも覚えています。大学院では、トミヨ属魚類を研究テーマとして選ぶもつばらの雑魚党です。多くのことを教えてくれた川の流れを守るため、特定外来種ウチダザリガニの駆除や、手作り魚道、マイクロプラスチック調査などの地域に根差した活動を行っています。

家電量販店に立ち寄り、ジーンズを味わったりしています。気分はまさに田舎から出てきた旅行者のようです。

札幌は、今や日本を代表する大都市となり、何でもそう便利な街へと発展しました。しかしその反面、この発展は野生動物に致命的な悪影響を与えてきました。ある調査によると、石狩川流域の湿地は、約9割が消失してしまっただけではありません。その結果、たくさん生き物の生息地が失われたことが容易に想像できます。では、都市の発展によって生息を失った生き物の中にシマフクロウはいたでしょうか？ 答えはYesです！ その証拠は北海道大学付属植物園博物館の展示室にいる1羽のシマフクロウの足元の小さなラベルを見るとわかります。このラベルには1881年(明治14年)11月に札幌で捕獲されたことが書かれています。シマフクロウ

の生息には、エサとなる魚がたくさんいることと繁殖のための大木がある自然豊かな河川環境が必要で
す。明治の札幌には、そんな豊かな自然があったと
いう事実には驚きます。

地域の自然を知る物差し

美幌博物館には、1987年(昭和62年)5月7日に町内で採集された最も古い魚類標本が収蔵されています。この標本をくわしく観察すると当時、その場所には、イワナ(テメマス)、サクラマス(ヤマメ)、フクドジョウ、シベリアヤツメ、トミヨ属淡水型、ヤチウグイの6種類の魚が暮らしていたことがわかります。それから22年後の2010年(平成22年)5月7日に同じ場所で再び調査を行いました。22年前には、小さなヤナギしか生えていなかった河畔の林は、大人の背丈をゆうに超える木々が生い茂り、雰囲気ガラリと変わっていました。川幅も少し狭まり、河床がかなり下がったように感じます。さらに、生息している魚は、イワナ(テメマス)、サクラマス(ヤマメ)、フクドジョウ、シベリアヤツメ、サケ、カラフトマスになりました。種数は同じ6種類ですが、とりわけサケの仲間が増えました。しかし、水の流れのゆるい場所を好むヤチウグイやトミヨ属淡水型は確認できませんでした。このように、博物館に収蔵される資料は、過去の自然環境を知る上で貴重な情報源となるのです。

北海道の淡水魚

サケやカラフトマス、ウグイに加え、マニアック

なところを言えばエソホトケドジョウやヤチウグイなど、北海道には約90種類の淡水魚が生息しています。ただし、これらすべての淡水魚が一生を川(真水)で過ごすわけではなく、約65%が一生の間に一度は海と関わりを持ちます。淡水魚なのに海と関わりがあるの?と疑問を持つ方が多いと思いますが、サケを例にするとご理解いただけると思います。サケは、川で生まれすぐに海へと下ります。そして、3〜7年間の海洋生活を経て、大きく成長すると産卵のために海からふるさとの川に戻ってきます。逆に、ウナギのように産卵場が海にあり、成長は川で行うというような淡水魚もいます。このように、一度でも川(真水)で過ごせば、一般的には淡水魚と言われます。かつて北海道の広大な自然の中では、たくさん



魚道づくり



手作り魚道の完成を喜ぶメンバー

淡水魚たちが海と川を自由に移動し、暮らしていました。しかし、最近では、農地や宅地造成、治水工事など、様々な理由で川をコンクリートで固められ、ダムなどの構造物が造られました。人の生活は豊かになりましたが、淡水魚の生活には、多大な悪影響を与えています。

手づくり魚道

キッカケは：「サケが、土手をのぼった！」なんだが、よくわからない状況に驚く私に、農家のおじさんは、さらに大きな声で「サケが、川の段差を越えられず、土手から川の上流を目指していったんだ！」やっぱ、よくわからない。詳しく話を聞いてみると、状況はこうでした。この川には、約1m



モニタリング調査



手づくり魚道を遡上したサクラマスの子

の段差（落差工）があり、この段差のせいで、サケが上流へ遡上できなくなっていました。上流に遡上しようとする段差の手前で何度もジャンプしているうちに、サケは土手に上がってしまい、そして、今度は土手を飛び跳ね、段差を越えようと必死にもがいていたのです。「このままでは、サケが可哀そうだ」その一言に、多くの方が共感し、手作り魚道の取り組みが始まりました。

魚道づくりは、2年間の活動で、のべ230名の方に協力いただきました。多くの方の協力で、11年（平成23年）に2基、12年（平成24年）に5基の魚道が完成しました。これで、魚の遡上の支障となっていた7つの段差に魚道が設置されました。これらの魚道は魚の遡上を可能にし、その結果、サクラマスやイワナなどのサケ科魚類が、約40年ぶりに戻ってきました。そして遡上した魚たちは、川の上流域で産卵し、翌春には稚魚が誕生しました。あれから10年以上が経ちましたが、毎年秋には魚の生息数や産卵床（魚が卵を産んだ場所）の調査を行い、手作り魚道の効果を検証しています。

よみがえれ！シマフクロウ

川の改修工事や森林の伐採により、シマフクロウは急速にその数を減らし、87年（昭和62年）、美幌町からも姿を消しました。しかし、近年、知床などを中心に環境省の保護増殖事業が行われ、シマフクロウの生息数は少しずつ増えてきています。鳥からすれば知床は美幌町のすぐ近くですから、生息数が増えれば、飛んでくるかもしれません。現に、20年

（令和2年、橋の橋脚に止まるシマフクロウが観察されました。ただ、その後、このシマフクロウは定着することなく別の場所に飛んで行ってしまいました。一生懸命、魚道づくりに取り組んできましたが、シマフクロウが安心して住める場所は、美幌町にはまだ無いようです。

今後、手作り魚道を通して川だけではなく周辺の森の再生も進め、シマフクロウが再び暮らせる美幌町にしていきたいと考えています。そのためにも、美幌町内だけでも100カ所以上ある魚が遡上できない場所を何とかしなければなりません。現在、手作り魚道の輪が広がってきてはいるものの、流域全体ではほんのわずかです。今後は手作り魚道の取り組みをさらに広げ、魚の移動を促進したいと考えています。



シマフクロウが住める場所を求めて

野生動物保全管理の担い手として・東の端の学芸員の仕事 —生物多様性ホットスポット根室で野生動物と人との共存を目指して—

北海道・根室。希少な野生動物が数多く生息するこの地で、
学芸員として自然と人との橋渡し役を担っている。

再生可能エネルギー開発や希少なワシ類の列車事故防止、
動物園での普及活動などを通じて、共生の道を模索する現場の取り組みを紹介する。

根室市歴史と自然の資料館・学芸員 外山雅大

とやま まさひろ 1978年、東京都生まれ。ライフワークとしてフクロウ類の調査研究を行っている。根室という土地柄、専門である鳥類だけでなく、湿原、海獣類など幅広く自然環境、野生生物全般の対応をしなければならず頭を悩ませながら博物館活動に従事している。

野生動物と人との共存を目指して

北海道の東の端、根室は風蓮湖、春国岱など渡り鳥の重要な中継地を有し、春と秋には多くの水鳥たちが羽を休めます。また、オオワシ、オジロワシの国内有数の越冬地であるほか、シマフクロウ、タンチョウなどの希少鳥類が生息し、沿岸には海鳥の集団繁殖地も多く、まさに鳥類の多様性のホットスポットといえます。

そんな根室に、私は自然史の学芸員として着任したばかりのころ、同じく学芸員として道内で働く友人から「希少種の多い場所だから、きつと大変だね」と言われたときは、正直、軽く受け流していました。しかし、実際に仕事に取り組みうちに、その言葉の意味を痛感するようになりました。希少種が多い場所とは、野生生物をめぐる問題が多く起こる場所なのだということを。



指導要領策定前に湿原を破壊し設置された太陽光発電。希少な植物が生育し、タンチョウの生息地にもなっていた



バードストライクで死亡したオジロワシの死体の一部

再生可能エネルギーと環境配慮の両立

地球温暖化対策として、再生可能エネルギーの導入は急務となっています。北海道でも太陽光や風力による発電事業が各地で進められており、根室も例外ではありません。しかし、その導入には環境破壊という負の側面が存在します。湿原に設置された太陽光発電施設や、風力発電の風車に衝突して命を落とすワシたちのように、自然環境や野生生物への影響が明確に現れるケースも後を絶ちません。

特に問題なのは、小規模な発電施設の場合、法的な環境アセスメントの義務がないため、事前調査や保全措置なしに設置され、自然環境へ負の影響を与えてしまうことです。根室市でも、希少な動植物が生息する湿原に太陽光発電施設の設置やワシ類の風車への衝突が相次ぎ、市民からは景観や野生生物への影響について懸念の声が寄せられています。

これを受けて、根室市では再生可能エネルギー発電施設設置に関する独自の指導要領（ガイドライン）を策定することになり、私は地域の専門家として、その策定に関わりました。一般的なガイドラインでは、種の保存法や文化財保護法に基づき、対象種が国内希少種や天然記念物指定種に限られていることが多いのですが、根室のように多様な希少種が生息する地域ではそれでは不十分と考え、環境省のレッドリストに記載された種まで配慮の範囲を広げるよう提案しました。

結果として、ガイドラインにはその考えが反映され、事業者には希少種の生息可能性がある地域での開発について、事前調査や専門家との協議を義務づけることが盛り込まれました。以後、事業照会のあった土地について、生物分布図や植生図、地形情報などを基に現地調査を行い、必要に応じて詳細な事前調査や保全措置等を求める、いわば「自然の番人」としての役割を担っています。



列車事故で死亡し回収されたオオワシ



設置したエゾシカ死体に集まるオオワシ



日没後にエゾシカ死体を食べにやってきたオオワシ（上）とオジロワシ（下）

ワシの列車事故とエゾシカの管理

冬になると、越冬のためオオワシやオジロワシが根室にやって来ます。時に人間の作ったインフラが彼らの命を脅かす存在になります。その一つが列車事故です。彼らは列車に轢かれたエゾシカの死体を食べようとして線路に降り、二次的に列車に衝突し、命を落としてしまうのです。

私も何度か事故現場に駆けつけ、死んだワシの回収や、怪我をした個体の捕獲を行いました。こうした事故を減らすには、エゾシカの死体を物理的にワシが利用できないようにすることが一つの手段です。環境省では、死体を覆うための被覆シートの開発を進めており、その活用が期待されています。

もう一つは、根本的な対策として、エゾシカとワシの行動を正確に理解し、それを踏まえた管理を行うことです。センサーカメラを用いた個体数調査や環境省によるGPS発信機調査から、根室では猟期になるとエゾシカが禁猟区に集中することが判明

さらに、根室市内でのワシの列車事故の発生地点と禁猟区が重なっていることが地図分析から明らかになりました。これを踏まえ、エゾシカの捕獲を所管する根室市農林課と連携し、線路に隣接する禁猟区において、エゾシカ捕獲用の罠を設置するように調整しました。また、ワシの行動を把握するため、森林内にエゾシカの死体を設置し、センサーカメラによる行動観察を行ったところ、設置後すぐに多くのワシが

集まり、夜間もエゾシカ死体を食べていることが確認されました。この結果は、環境省が主催した根室地域のエゾシカ管理に関して情報交換を行う協議会で報告し、JR北海道の列車運転士への注意喚起資料として活用してもらうことができました。

動物園展示を通じてシマフクロウを守る

世界最大級のフクロウであるシマフクロウ。現在、北海道内には100つがい前後しか確認されており、絶滅が危惧される野生動物の一つです。学生時代からフクロウ類の研究に取り組んできた私にとつて、シマフクロウは特別な存在であり、環境省の保護増殖事業で実施されている標識調査や巣箱の設置、生息地の巡視などに関わらせてもらっています。

こうした活動の中で、頭を悩まされるのが一部のカメラマンによる過剰な撮影行為です。シマフクロウは繁殖成功率が低く、1回の繁殖が成功するかどうかが非常に重要です。カメラマンが巣やヒナに近

づくことで、抱卵をやめたり、警戒した親鳥がヒナから離れ、ヒナが捕食に遭ってしまふなど、彼らの生存を脅かすことにつながります。私自身も巡視中に、営巣地に入り込み撮影していたカメラマンを見つけ、注意をし、口論になったこともあり。また、SNSには、巣立ち間もない幼鳥や、警戒する親鳥の写真が数多く投稿されています。

このような状況を少しでも変えるために何かできないかと考えていた時、環境省の専門家会議の場で旭川市旭山動物園の坂東園長（当時、現・統括園長）から「域内（野外でシマフクロウの保護に関わる人々）」と「域外（動物園など飼育環境でシマフクロウに関わる人々）」が連携し、動物園という場を活用してシマフクロウの現状や保全活動を広く社会に伝える機会を作ろうという提案がなされました。

動物園という幅広い層の人が訪れる場所で、実際にシマフクロウを目にしながらその生態や課題を学べる機会を設けることができれば、シマフクロウをはじめとした野生動物との関わり方を考えてもらうきっかけにもなると感じ、取り組みに参画しました。この取り組みでは、学芸員としての経験とスキルを活かして関わることができました。仲間たちと行った展示パネルの企画・制作、旭山動物園での来園者へのガイド、講演活動などを通じて、単なる知識の提供にとどまらず、来園者がシマフクロウの生態を楽しく学び、シマフクロウ、そして野生生物との共存を考えるきっかけとなるよう心がけました。例えば、『シマフクロウ・トランスフォーム』という展示パネルでは、警戒の度合いによってシマフクロウが

シマフクロウ域内域外連携チームで制作した、シマフクロウの生態、保護増殖事業、動物園での取り組みを紹介したパネル。日本動物園水族館協会を通じて全国のシマフクロウ飼育館へ配布された



旭川市旭山動物園でのガイドの様子

シマフクロウ・トランスフォーム

ドからのたより』を通して、その生態と現場の取り組みを発信しています。さらに、自分も含む実際に野外で保護活動に携わる研究者や調査員が、シマフクロウ舎でガイドを行うことで、シマフクロウの「今」と、保護活動の最前線の声を直接多くの人に届けることができました。

2025年春に環境省から人の行動によりシマフクロウの生息環境が悪化しないようにホームページを使って『シマフクロウとの共存ルール』の発信をしています。この共存ルールはシマフクロウの保護増殖事業に関わってきた専門家や現場で調査保護活動に携わる調査員、そして環境省職員が議論を重ねて作られたものです。多くの方にシマフクロウやその生息環境を知ってほしいという思いがこめられたホームページを、是非、一度見ていただければと思います。

野生動物の保全は野外の現場だけで完結するものではなく、動物園のような「発信の場」を通じて人々の理解と行動を変えていくことも、その一翼を担う重要な仕事だと感じています。

今後も、野生動物に関わる問題が多く起こる根室という町で、北海道の野生動物と人との間に立ち、共に生きるための「繋ぎ役」としての役割を、学芸員という立場から果たしていければと思っています。



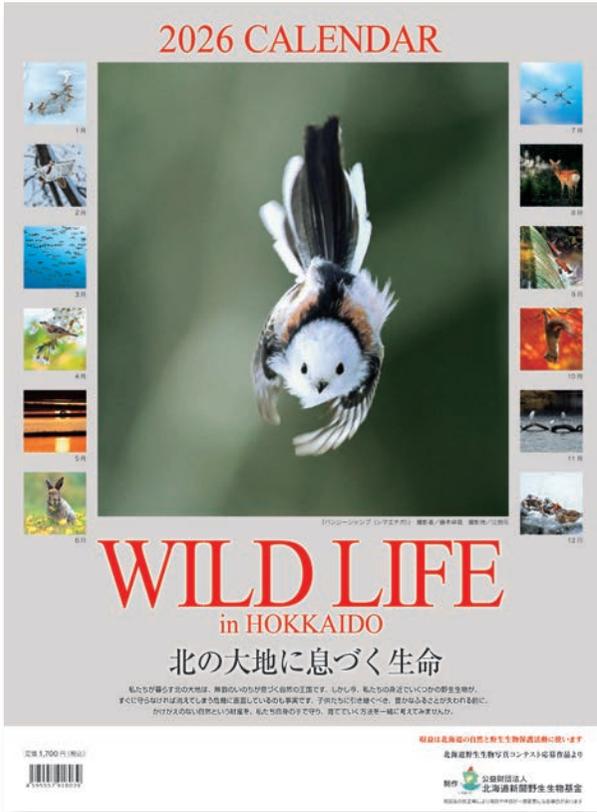
シマフクロウとの共存ルール
シマフクロウと共に暮らす [環境省ホームページ]
<https://policies.env.go.jp/hokkaido/witfshowl/rule/>

北海道の大自然と 野生生物を あなたのお部屋に

北海道野生生物写真コンテストの全応募作から、厳選した写真でカレンダーを制作しています。動物部門は、迫力の大判とかわいい表情を集めた中判吊下げタイプ、植物部門は卓上型で美しい花々を紹介、使用後はポストカードとして利用できます。



卓上タイプ
「野の花と樹」
13枚、ケース付き
縦 10.5cm × 横 20.5cm
1,200円 (税込)



吊り下げタイプ 動物シリーズ
「ワイルド・ライフ」
13枚綴り
縦 51.5cm × 横 36.4cm
1,700円 (税込)



吊り下げタイプ 動物シリーズ
「かわいどうぶつカレンダー」
8枚綴り
縦 21cm × 横 29.7cm
1,400円 (税込)

企業カレンダーとして

「ワイルド・ライフ」「野の花と樹」は、50部以上のご注文で企業名、住所、電話番号、企業ロゴをサービスで印刷致します。費用など詳しくはお問い合わせ下さい。

お問い合わせは
公益財団法人北海道新聞野生生物基金
札幌市中央区大通東4丁目1
TEL 011-210-5773 FAX 011-210-5774
nature@hokkaido-np.co.jp

取り扱い書店 ※10月以降、順次店頭に並ぶ予定です

- 道内札幌、江別、函館、旭川、北見、釧路、帯広、根室、士幌町の一部書店など
- 道外東京、茨城、大阪、福岡の一部書店など
- 道新オンラインストア



Doshin
Online Store
DOSHIN ONLINE STORE





「自然と人が共にある未来を目指して」

札幌市円山動物園は1951年に開園した北海道で最も古い動物園です。野生動物の保全を通じた生物多様性の保全に取り組んでいます。



さっぽろ円山動物園 サポートクラブ



円山動物園の応援団体「さっぽろ円山動物園サポートクラブ」は、2025年度から「特定非営利活動法人（NPO法人）」となりました。今後、動物園の動物たちと地球上の動物たちがより幸せに暮らせるよう活動を行っていきます。そのために広く寄附を集めています。皆様からの寄附は、動物園内の飼育環境の整備、動物園を拠点とした環境教育、動物たちの本来の生息地の保全活動に使います。



札幌市動物園条例



2022年6月、札幌市は動物園のあるべき姿を定めた国内初となる「札幌市動物園条例」を制定しました。



動物園応援基金



札幌市は「動物園応援基金」を設置し、積み立てられた市民の皆様からの寄附金を円山動物園の獣舎の改修等に活用していきます。

さっぽろ Sapporo Maruyama Zoo

円山動物園

<https://www.city.sapporo.jp/zoo/>

札幌市中央区宮ヶ丘3番地1
Tel: 011-621-1426

さっぽろ円山動物園サポートクラブ事務局(札幌市円山動物園内/電話番号同じ)

